

# 1988年セルビアにおける大衆運動とナショナリズム

—— ヴォイヴォディナの諸集会についての一考察 ——

鈴木 健 太

## はじめに

第二次世界大戦後に建国された社会主義ユーゴスラヴィア<sup>(1)</sup>の歴史において、1980年代、とりわけその末期は、1991年以降の国家解体とそれに伴う戦争の直前の時期にあたる。他の東欧の社会主義国において、ベルリンの壁崩壊に象徴されるような一連の体制変動が生じつつあったこの時代、ユーゴスラヴィアでも体制の「危機」が自覚され、その対応に向けた諸策が進められた。しかし後の国家解体と紛争を念頭に置いた場合、そうした変革への動きは、最終的な国家の崩壊が「準備」された過程としても捉えることができるだろう。

そのような1980年代末のユーゴスラヴィアにおいて大きな政治的議論となったのは、憲法体制をめぐる路線の相違であった。それは最終的に1989年にかけてセルビアとスロヴェニアの二共和国間の対立へと発展し、そのなかで民族や共和国の価値を強調するナショナリズムが顕著に見られるようになった。この点に関して、従来の研究や著述では、政治指導者が利害関係や支持拡大のための手段として民族的な主張を唱え、そうした上からの働きかけによって、国内にナショナリズムの高揚がもたらされた点がしばしば指摘される。とりわけその最たる例として扱われるのが、路線対立の一方の勢力を担ったセルビア共和国<sup>(2)</sup>党指導部とその長スロボダン・ミロシェヴィチ (Slobodan Milošević) の役割である<sup>(3)</sup>。

本稿は、こうした1980年代末の、とくに1988年のセルビアにおける政治過程とナショナリズム<sup>(4)</sup>の関係について、共和国内で生じた大衆運動の様相から再検討を試みるもので

- 1 本稿で「ユーゴスラヴィア」とは第二次世界大戦後の社会主義国家、ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国(1963年までの名称はユーゴスラヴィア連邦人民共和国)の意味で用いる。
- 2 正式には「セルビア社会主義共和国」であるが、本稿では以下、「セルビア共和国」ないし「セルビア」とする。また同共和国内のヴォイヴォディナとコソヴォの「社会主義自治州」についても同様に、「自治州」とするか、名称のみを用いた。
- 3 例えば、Laura Silber and Alan Little, *The Death of Yugoslavia*, rev. ed. (London: Penguin / BBC Books, 1996); John R. Lampe, *Yugoslavia as History: Twice There Was a Country*, 2nd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 2000); Lenard J. Cohen, *Serpent in the Bosom: The Rise and Fall of Slobodan Milošević* (Boulder: Westview, 2001) 等。とくに後の連邦解体や民族間の紛争の結果を受け、この政権によるナショナリズムへの傾倒が、当時のユーゴスラヴィア政治の趨勢を決定づけたとする見方は少なくない。こうした議論の動向については、Jasna Dragović-Soso, “Why Did Yugoslavia Disintegrate? An Overview of Contending Explanations,” in Lenard J. Cohen and Jasna Dragović-Soso, eds., *State Collapse in South-Eastern Europe: New Perspectives on Yugoslavia's Disintegration* (West Lafayette: Purdue University Press, 2007), pp. 13–17 など参照。
- 4 本稿では「ナショナリズム (nationalism, nacionalizam)」を広く捉え、国民化や独立といった具

ある。この年の7月からセルビアのヴォイヴォディナ自治州では、集会在頻発するようになり、それはセルビア本土とモンテネグロの各地へ連鎖的に拡大した。後に「反官僚革命 (antibirokratska revolucija)」と呼ばれた一連の運動は、当時のコソヴォ問題の解決やそのための憲法改正を訴えるとともに、ミロシェヴィチ率いるセルビア党指導部への支持の拡大と確立、自治州を含む共和国全体の改憲に向けた路線の統一という結果を生み出した。

これらの運動は、同時代のセルビアの政治と社会、またユーゴスラヴィアの解体を扱った従来の諸研究にほぼ必ず登場する。そこでは基本的に、セルビア党指導部による組織化の側面が強調され、コソヴォの問題を踏まえた憲法改正とそれを進める党指導部への支持を拡大するためにナショナリズムが利用された点が指摘される。だが、こうした見方の多くは、1990年代初頭の国家解体と紛争をめぐる議論の前史として提示されるに留まることがしばしばであり、一連の運動そのものを直接具体的に扱った研究は僅かである。

そのなかで、本稿との関連において、ケルチョヴほかとヴラディサヴリエヴィチによる社会学からの2つの著作は重要な先行研究として挙げられる<sup>(5)</sup>。前者の共著は、発端となったヴォイヴォディナの諸集会に関して、翌1989年に実施したアンケート調査の結果をもとに、運動の起源と特徴、参加の構造と要因などを検証し、出来事の実態を総合的に明らかにする<sup>(6)</sup>。一方、後者の単著は、一連の「反官僚革命」について社会運動の形成の観点から検討し、動員の社会経済的な構造や権力関係に光を当てる。その際、もっぱら運動がナショナリズムを用いた上からの計画的な組織化であったとする従来の見方を批判し、草の根的な下からの動員と政治参画の側面を示した。

これらの研究において、ナショナリズムの問題は、当時の運動を束ねる様々な構成要素のひとつとして扱われる。そこではナショナリズムの有無、すなわち、民族的な価値を強調する考え方がどの程度影響を及ぼしたかについてある程度検討されている。だが、ナショナリズムが一連の事象において、いかなる意味と役割をもち、また当事者の間でどのように理解されたり、用いられたりしたのかといった、ナショナリズムと具体的な運動の過程との関係はいまだ不明瞭であるように思われる<sup>(7)</sup>。本稿では、ナショナリズムに特化し、この概念や

---

体的な政治目的に関するものから、例えば「ネーションおよびそれと等価な概念 (国名等) の価値を奉じる言論および実践の集合」といった包括的な定義までを念頭に置いている (佐藤成基「ナショナリズムの理論史」大澤真幸・姜尚中編『ナショナリズム論・入門』有斐閣、2009年、44頁)。なお、「ネーション」にあたる原語 (「nation」「narod/nacija」) については「民族」とし、それに合わせて、「ナショナリズム」の派生語の「nationalistic」「nacionalistički」なども「民族主義的」と訳出した。

5 Sava Kerčov, Jovo Radoš and Aleksandar Raič, *Mitnzi u Vojvodini 1988. godine: rađanje političkog pluralizma* (Novi Sad: Dnevnik, 1990); Nebojša Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic Revolution: Milošević, the Fall of Communism and Nationalist Mobilization* (New York: Palgrave Macmillan, 2008).

6 アンケート調査は、同年6月から10月までの間、集会の展開に重要な役割を果たした6つの都市・村を中心に雪だるま式標本抽出 (snowball sampling) を用いて行われ、ヴォイヴォディナ各地の1,070名を対象としたものである (詳しくは、Kerčov et al., *Mitnzi*, pp. 7-10)。調査結果を含めてこの研究は研究史上、史料集的な意義をもち、本稿でも適宜参照した。

7 この点に関して、ナショナリズムについての「過程の動態」を理解する重要性を述べたブルベーカーの主張を参照。Rogers Brubaker, “Rethinking Nationhood: Nation as Institutionalized Form,

原理が運動の諸相にどう位置づけられていたかを考察することをめざしたい。

以上の問題意識を踏まえ、本稿はヴォイヴォディナの諸集會に焦点を当て、これらの展開におけるナショナリズムの機能を検討する。一連の大衆運動の契機となり、その後数か月の伸展を先導した事象を個別に詳しく見ることは、当時の大衆運動とナショナリズムの関係を理解する上で少なくない意義をもつ。またセルビア北部のこの地域には、ハプスブルク帝国統治の植民政策によって様々な民族が入植した経緯から、多数派のセルビア人の他、ハンガリー人、クロアチア人、スロヴァキア人、ルーマニア人、ルシン人などが居住する。そうした歴史的経緯と多様な民族構成は、自治州の地位が付与される理由であったとともに、後述のように、大衆運動の進展とその性格づけに重要な意味をもたらした。このようなヴォイヴォディナにおける運動の特性を踏まえつつ、以下では、諸集會の全般的な構図に加え、個々の局面や言動、党指導部の対応、諸集會をめぐる評価と議論を分析しながら、集會の諸相にナショナリズム、つまり民族（主義）的な価値や言動がどのように結びついていたのかを考察する。史資料としては、ケルチョヴほかやヴラディサヴリエヴィチの研究を含む二次文献を活用しつつ、主に同時代の新聞・雑誌<sup>8)</sup>、記録集などを中心に用いて個々の具体的局面の検討にあたる。

まず第1節では議論の前提として、1988年までのユーゴスラヴィアおよびセルビアが置かれた状況を概観する。続く第2節ではヴォイヴォディナの諸集會の基本的な経緯について述べる。そして第3節では、諸集會の主体、要求、動員の様相をそれぞれ整理し、集會にナショナリズムがどの程度影響を及ぼしたのかを把握する。それを踏まえ、第4節では、ナショナリズムが関連する個々の具体的局面に着目し、ナショナリズムをめぐる議論にも目を向けながら、集會とナショナリズムとの関係を考えていく。

## 1. 前史：1980年代ユーゴスラヴィアの体制危機とセルビア

### 1-1. 体制危機とその影響

自主管理や非同盟を軸とした独自の路線のもと、社会主義ユーゴスラヴィアの体制は、1970年代頃までに一定の経済成長と社会的安定を迎えた。しかし80年代に入ると、様々な問題が浮上し、体制の「危機」が取り沙汰されるようになる。本稿で扱うヴォイヴォディナ／セルビアの大衆運動の背景には、体制の困難が継続し、80年代末においても事態の好転が見られなかったことがひとつの遠因となっている。

とりわけ深刻であったのが、1980年代を通じて悪化した経済状況である。第二次石油危機に伴う世界的不況のなか、貿易収支の大幅赤字や対外債務の累積とともに自主管理経済は不調に陥った。恒常的インフレと物価高騰、所得減少、経済成長率のマイナス化、消費水準の減退などが表面化し、80年代末には国民生活がかなり圧迫されるようになる。他方、政

---

Practical Category, Contingent Event,” in Brubaker, *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p. 21.

8 とくに、ユーゴスラヴィアの連邦全体で読まれた唯一の日報『ボルバ（闘争）』（*Borba*）、主にセルビア共和国を中心に流通した日報『ポリチカ（政治）』（*Politika*）および週刊誌『ニン』（*NIN*）を用いた。

治の危機となったのがいわゆるコソヴォ問題である。同自治州の州都プリシュティナでは、81年3月、域内多数のアルバニア人の経済的不満が暴動に発展し、自治州の共和国格上げを要求する動きが生じた。事態はひとまず沈静化されたが、一部のアルバニア人の不満と要求はその後も続き、自治州内ではアルバニア人と少数のセルビア人やモンテネグロ人の間の住民関係が緊張化した。民族的他者への差別、抑圧、犯罪などが生じ、治安の悪化が顕在化する一方、セルビア人やモンテネグロ人のセルビア本土などのコソヴォ外への退去や移住が進む。こうした自治州の統治と民族間関係をめぐる諸問題は常態化し、「コソヴォ問題」として80年代後半には連邦全体で共有される最重要課題のひとつとなった。

このような危機的状況は、当時の1974年憲法に基づく体制の矛盾と弱体化を浮き彫りにした。同憲法は、独自の「自主管理」の総決算として、分権化の徹底を定めたものである。連邦制においては共和国と自治州がほぼ同等の権限をもつ「極めて緩い」体制が敷かれ<sup>(9)</sup>、経済・社会面ではより小さな単位で企業や行政の労働者自主管理を追求する仕組みがとられた。経済危機とコソヴォ問題は、こうした74年憲法の是非を問い、憲法改革の論議を開くと同時に、党の求心力や正統性を低下させた。そうした状況下で80年代には、体制への批判や抗議を直接的に示す現象が散見されるようになる。なかでも耳目を集め、当局の危機感と呼んだのがナショナリズムの顕在化とストライキの多発である。

多民族を包摂するユーゴスラヴィアでは「諸民族の平等」が国是とされ、ナショナリズムは基本的に、民族間関係を悪化させ得る反体制的な概念として位置づけられた。しかし同時に、ナショナリズムが競合する利害や対立関係を代弁する手段として、少なくとも体制下で認められていたのも確かである<sup>(10)</sup>。民族自決に基づく連邦制において民族ないし共和国は意思決定の主体であり、各々が民族的な権利と平等を主張することは決して例外的でなかった<sup>(11)</sup>。だが80年代には、体制の諸問題と党の求心力低下のなかで、体制批判や反体制的な言動がこれまで以上に目立ち始め、とくに、民族的価値を信奉する知識人や活動家のそうした主張にはナショナリズムが公然ともち出された。先述したコソヴォのアルバニア人による共和国格上げ要求はその最も早い例である。そしてセルビアでも、後述のように、コソヴォ問題と関連して、ナショナリズムに訴える主張が散見されるようになった。

加えて、1980年代後半に顕著になったのがストライキ<sup>(12)</sup>の増加である。ユーゴスラヴィアにおいてストライキは、企業の現行制度を迂回する抗議手段として時に用いられており、それ程珍しくはない。だが80年代後半にストの件数と参加者数は徐々に増加し、いずれの共和国でもその発生が拡大した<sup>(13)</sup>。背景にはもちろん経済状況への不満がある。ストの要

9 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』岩波書店、1996年、129頁。

10 John B. Allcock, "Rhetorics of Nationalism in Yugoslav Politics," in John B. Allcock, John J. Horton and Marko Milivojević, eds., *Yugoslavia in Transition: Choices and Constraints* (New York: Berg, 1992), pp. 286–287.

11 もちろんこうした認められたナショナリズムも、1970年代初頭の「クロアチアの春」のように行き過ぎた場合は処罰の対象となった。

12 正式には「労働停止」と呼ばれ、社会主義的諸制度の変革をも意図し得る「ストライキ」と区別された。

13 1987年、88年には、全体の件数が86年の約2倍、参加者数は3倍以上に上昇し、1件あたりの時間も当初の数時間から1日以上に伸長した。Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, p. 112, Table 4.2 参照。

求の中心を占めたのは、賃金上昇、経営悪化企業への補助金増加、経営陣の解任、企業内外の官僚や行政の大幅な縮小であった。とくに87年前半の連邦議会による緊縮政策の採択、88年5月の連邦執行会議による大企業における賃金凍結と緊縮政策のさらなる引き締めは、ストの急激な増加の引き金となった<sup>(14)</sup>。このように経済的な苦境は、自主管理の主役たる労働者が直接行動に訴える機会を増大させていった。

## 1-2. コソヴォ問題とセルビアの状況

以上見た体制危機の状況は、セルビア共和国においても例外ではない。そして何より、当時の共和国内の動向を大きく特徴づけたのがコソヴォの情勢であった。

1974年憲法では、自治州と共和国にほぼ同等の権限が認められており、コソヴォの統治や民族間関係、あるいは民族的同胞の困難に対応しようにも、セルビア共和国はコソヴォ自治州の内政に直接関与できない。また分権化を徹底した同憲法下では連邦政府の対応範囲も限定されていた。その一方で、多数のアルバニア人と少数のセルビア人からなる自治州政府から有効な方策は示されなかった。こうしてセルビアでは、主にコソヴォ問題との関係から、74年憲法を批判し、その見直しを求める主張が次第に大きくなっていく。その中心にいたのが一部の知識人や反体制派、ナショナリストである<sup>(15)</sup>。また80年代後半には、報道や世論にコソヴォの民族的同胞の被害や苦境を盛んに取り上げる論調が目立つようになった。こうした言論はしばしばナショナリズムと結びつき、現行憲法（あるいは戦後のユーゴスラヴィア）においてセルビア人の自己主張が抑えられてきたという見方やセルビア民族全体の危機を訴える主張など、民族主義的な自己理解に基づく言説が登場した<sup>(16)</sup>。

このようなコソヴォをめぐる共和国内の状況において、1980年代後半にはとくに人的要因に関する二つの動きが生じた。どちらも、次節以降で検討する1988年の大衆運動に重要な役割を果たしており、それぞれ確認しておきたい。

第一に、共和国党指導部におけるミロシェヴィチの台頭とその政権の確立である。同党指導部の実権は、1980年代中葉までI・スタンボリチ（Ivan Stambolić）とその派閥が握っていた。だが87年になると、スタンボリチの庇護を受けて党内2番手に上昇したミロシェヴィチの一派とスタンボリチ派の対抗関係が表面化した。ミロシェヴィチは党内の権力闘争を有利に進めながら、同年9月の共和国党組織<sup>(17)</sup>中央委員会第8回総会で反対派の幹部を失脚させることに成功し、スタンボリチに代わって共和国党指導部内の権限を掌握した。その後1988年にかけて、共和国の党組織と諸機関では人員の刷新が行われ、スタンボリチ支持者のミロシェヴィチ派への交代が進められた<sup>(18)</sup>。このセルビア党指導部の転換について、一

14 Ibid., pp. 111–113 参照。

15 なかでも民族派の知識人や学者が執筆し、1986年9月に草稿のまま漏洩したセルビア科学芸術アカデミーの「覚書」（Memorandum SANU）は、こうした主張に学術的な根拠を与えた。

16 こうした見方は、74年憲法制定時、積極的に同憲法を受け入れたセルビア党指導部の見解とは全く異なる。詳しくは、Dejan Jović, *Jugoslavija – država koja je odumrla: uspon, kriza i pad Četvrtre Jugoslavije* (Belgrade: Samizdat B92, 2003), Chap. 3 参照。

17 正式には、セルビア共産主義者同盟。

18 Vladislavjević, *Serbia's Antibureaucratic*, p. 75. また拙稿「1987年セルビアの党内論争とナショナリズムをめぐる議論：バラチン事件とセルビア党中央委員会第8回総会」『東欧史研究』38号、2016年、3–24頁。

部の研究や著述では、ミロシェヴィチのナショナリズムへの傾倒がその成功要因としてしばしば強調される。だがどちらの派閥も、共和国内のナショナリズムに訴える論調をたしなめ、批判する立場をとったという点では一致する。むしろ、ミロシェヴィチの台頭と人気を後押ししたのは、危機に対して断固たる決意で変革を実行するというような、いわゆる鷹派の姿勢であった。そのために、かつてのティトーのように、建国期からの国是である「友愛と統一」を掲げ、何よりも党の「統一」をめざす主張が唱えられた<sup>(19)</sup>。

第二に、コソヴォのセルビア人活動家を中心とする動きである。1980年代のコソヴォ情勢の悪化は、当地のセルビア系住民の間に、現状への抗議とその改善を訴える行動を生み出した。多くの場合、その際の人的関係が形成される場となったのが、党の大衆組織である労働人民社会主義同盟 (Socijalistički savez radnog naroda –SSRN) のような各自治体の公的機関である。なかでもプリシュティナ郊外のコソヴォ・ポーリエ (Kosovo Polje) の労働人民社会主義同盟に集まった人びとは、85年頃から連邦や共和国の関係機関に請願書を送付し、首都ベオグラードでは直接の嘆願行動を実行した。また地元のコソヴォでは、草の根の支持を獲得して各地の抗議活動の中心となり、自治州内のネットワークを結んだ。これらの活動は、犯罪、財産没収、様々な差別といった被害の現状を示しつつ、セルビア系住民に対する法的保護の欠如と不平等を訴えた。その目的は、自治州のみならず共和国や連邦の党指導部や世論に対してコソヴォの実情への関心を喚起し、その対処の必要性を認識させることである。それらの活動は概して結果的に容認され、厳しい抑圧や直接の処罰を受けることは少なかった。労働人民社会主義同盟などを介して現状への不満と抗議を表明することは、現行制度の枠内にあった。それは、同じ自治州内の活動であっても、一部のアルバニア人によるコソヴォの共和国格上げ要求とは異なるものと見なされた<sup>(20)</sup>。

そして、以上見たミロシェヴィチの台頭とコソヴォのセルビア人活動家の動きが最接近する機会となったのが、1987年4月のミロシェヴィチのコソヴォ・ポーリエ訪問である。ここでミロシェヴィチは、前年に同地を訪れたスタンボリチと異なり、セルビア人活動家による予期せぬデモ行動にも直接対応し、セルビア系住民との会談を行った<sup>(21)</sup>。このことは、ミロシェヴィチの評価を高めただけでなく、公的な関心を呼び込むにあたって共和国党組織トップの行動を引き出したという点で、コソヴォのセルビア人が組織する活動の進展にとって少なくない意義をもった。

## 2. ヴォイヴォディナにおける大衆運動の展開

経済不況に声をあげるストライキ、そしてコソヴォのセルビア人の抗議行動は、全国的に目を引くようになったが、大局的には1988年前半頃まで、依然として局地的、個別的な現象に留まっていた。しかし1988年夏にかけて、とりわけセルビアとスロヴェニアで、街頭

---

19 Jović, *Jugoslavija*, pp. 370–376 参照。

20 以上, Vladislavjević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 88–108 参照。

21 この訪問は、ミロシェヴィチに対する共和国内の評価と人気を一気に押し上げた事件として知られる。詳しくは、例えば Jović, *Jugoslavija*, pp. 377–381 参照。

行動がより明確な政治目標と大衆的な規模を携え、継続的な運動の性格を帯びるようになった<sup>(22)</sup>。セルビアにおいてその最初の契機となったのがヴォイヴォディナ自治州の諸集会である。本節では、それらの基本的な経緯について事実関係を中心に述べる。

## 2-1. 集会の発生と展開

一連の出来事の発端となったのは、1988年7月9日、ヴォイヴォディナの州都ノヴィ・サドで開かれた抗議集会である。同日土曜の朝、ノヴィ・サドの鉄道駅に到着したコソヴォからの一団は、現地に駆け付けた支持者や関係者と合流し、待ち受けた警察(民警)を押し切って市内中心へ向かった。一行はコソヴォの状況を訴えるために、市内をデモ行進し、中心部の広場で集会を開催すると、そこに数千もの地元の人びとが加わり、歓迎や支持が示された。そして午後3時頃、集会は大きな混乱もなく幕を閉じ、コソヴォの一団は鉄道駅に戻り、南への帰路についた<sup>(23)</sup>。

このノヴィ・サドの集会は、コソヴォのセルビア人活動家を中心とする1980年代中葉からの活動のなかで、初めてヴォイヴォディナで実行された行動である。コソヴォの活動家の間では、以前からもうひとつの自治州で行動を起こす提案が出されており、6月24日、コソヴォ・ポーリエの労働人民社会主義同盟の会合にて、州都ノヴィ・サドでの直接行動とそのため「抗議集会組織委員会(Odbor za organizovanje protestnih okupljanja)」の結成が決定された<sup>(24)</sup>。ヴォイヴォディナで行う理由は、コソヴォの境遇をコソヴォ外に訴えるという意図はもちろん、74年憲法の改正に関するヴォイヴォディナ自治州党指導部の姿勢にあった。体制危機の現状を受け、既に1987年1月から国内で憲法改革の議論が着手されるなか、共和国・自治州の間には当初からその方針をめぐる相違が存在した。セルビアに関して言えば、セルビア党指導部はコソヴォ問題の早期解決をめざし、憲法改正と集権化に積極的であった一方、コソヴォと並び、同憲法下で共和国とほぼ同等の権限を有するヴォイヴォディナの党指導部はそうした動きに抵抗した<sup>(25)</sup>。もちろんコソヴォの活動家は、状況改善のために憲法改革を支持しており、そうした反対勢力の地元で実際に行動を起こし、人びとの関心と支持を惹きつけることは重要な戦略として考えられた。集会の予告に対し、ヴォイヴォディナ党指導部は非難と警告を与え、コソヴォ・ポーリエの中心的人物のなかにはノヴィ・サド行きを回避する意見も見られたが<sup>(26)</sup>、集会は最終的に予定通り決行された。

ノヴィ・サドの集会を皮切りにヴォイヴォディナでは、同様の抗議集会やそれを支持する

22 スロヴェニアの動きについては、後続の注87の記述を参照。

23 *Borba* (Belgrade), 11. 07. 1988, p. 3; Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 123–124; Kerčov et al., *Mitinsi*, p. 42 参照。

24 Kerčov et al., *Mitinsi*, pp. 25–27. 当初の名は「出発準備委員会」。本稿では以下、「組織委員会」とする。

25 Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 121, 126–127. 両党指導部の間では1987年以降、憲法改革に関する協議が何度か行われたが、いずれも不調に終わった。他方、アルバニア人多数のコソヴォ党指導部は改憲に反対するものの、コソヴォ問題の当事者として事実上大きな発言権を持たず、共和国内ではヴォイヴォディナの党指導部が反改憲の主要勢力をなした。なお、同党指導部の民族的な多数はセルビア系である。

26 *Ibid.*, pp. 122–123.

街頭行動が、他の都市・町でも見られるようになった。本稿末尾の表が示すように、その動きは7-8月は散発的であったものの、9月になると一気に増え、時に複数か所で同時多発的に発生しながら、頻発する様相を呈した。その頂点を迎えたのが、10月5-6日のノヴィ・サドで開かれた3度目の、最大規模の集会である。これによりヴォイヴォディナの党指導部は総辞職に追い込まれ、その後各地の集会は徐々に収束していった。一連の集会について数字を示すなら、7月9日から10月中旬までのおよそ3か月間に自治州各地の28自治体で計33の集会が発生し、全体で延べ推定57万7千500人が参加したという<sup>(27)</sup>。

## 2-2. 諸集会の帰結と結果

集会がヴォイヴォディナ各地に広がり、参加者も拡大するなか、当初のコソヴォの活動家を主体とした行動は、コソヴォへの関心喚起のみならず、次第に経済危機、憲法改革、指導層批判といった様々な問題を盛り込んだ包括的な運動に発展していった。これに伴い、集会の要求も複数化し、より明確なものになった。コソヴォ情勢の解決に向けた改憲要求、また体制危機の責任を求める官僚層の糾弾が打ち出されるようになり、さらにここからより急進的に、ヴォイヴォディナ党指導部の退陣要求が浮上していく。

最大規模となった10月5-6日の集会を生んだ直接のきっかけは、10月2日にノヴィ・サド近郊の町バチュカ・パランカ(Bačka Palanka)で開かれた集会である。そこでは自治州党指導部に対する辞任要求が公然かつ批判的に言及されたため、同党指導部は集会の演説内容を問題視し、演説者2名の政治責任を追及する声明を出した<sup>(28)</sup>。これに対し4日、バチュカ・パランカでは地元の農業機械製造企業「Majevisa」の労働者を中心に抗議行動が組織され、その動きはそのままノヴィ・サドへのデモ行進に発展した。一行がノヴィ・サドに到着すると、そこに州都の諸企業の労働者、地元住民、また他地域からも人びとが合流し、ヴォイヴォディナ党指導部の辞職を要求する集会に発展する。群衆の数は翌5日にはおよそ10万の規模に膨れ上がり、自治州党組織の庁舎前で圧力を増していった。こうした状況を受け、集会代者と自治州党指導部の交渉を経て、6日に自治州党組織州委員会の臨時総会が開かれると、党指導部はその場で辞任案を提出し、それは賛成多数で可決された<sup>(29)</sup>。

こうして一連の集会が、自治州党指導部の辞職に帰着したことは、ヴォイヴォディナおよびセルビアの政治関係に重要な転換をもたらした。ノヴィ・サドの大集会後、ヴォイヴォディナの他の自治体では、自治州党指導部の退陣に倣って、地元の党指導部に同様の退陣を求めたり、あるいは自治州党指導部の退陣を支持したりする集会が開催された<sup>(30)</sup>。翌11月には、

27 Kerčov et al., *Mitinzi*, p. 30. 1981年の国勢調査では、自治州の人口はおよそ203万(セルビア共和国統計局公式サイト、1981年国勢調査結果参照 [http://pod2.stat.gov.rs/ObjavljenePublikacije/G1981/pdf/G19814001.pdf] 2018年3月15日閲覧)。

28 2名は同地の地方議会議長ラドヴァン・パンコヴ(Radovan Pankov)と党支部委員ケルテース・ミハーイ(Kertész Mihály / Mihalj Kertes)。どちらも5-6日の集会開催の中核をなした。

29 Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 157-158; Kerčov et al., *Mitinzi*, pp. 47-49 参照。「およそ10万」の出典は前者。後者には20万以上とある。この5-6日の集会は、デモ隊が差し入れのヨーグルトの紙容器を庁舎に向けて繰り返し投げたことから、後に「ヨーグルト革命(jogurt revolucija)」とも称された。

30 Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, p. 160.



自治州の新たな党指導部が発足し、域内の各自治体でも同様の動きが続いた。こうした各指導部の刷新は、全体として、旧自治州党指導部の支持者が追放され、セルビア共和国党指導部寄りの体制がつくられる形で進んだ。このことは、一連の集会によって、コソヴォを除くセルビア全土で、共和国党指導部を中心とする政策路線の一元化が計られたことを意味した。それは、各地の集会を通してコソヴォ問題の解決、憲法改正、官僚の退陣といった方針がヴォイヴォディナで賛同され、またその担い手としてセルビア共和国党指導部が支持されたという集会の結果を追認するものであった。

他方、大衆的なデモの圧力によって党指導部が辞職する事態は、ユーゴスラヴィアの社会主義政権において初めての出来事であった。それは、これまでの党や諸制度を介した手続きではなく、大衆の直接的な行動が一定の正統性を獲得し、政治的な決定に影響を及ぼし得るという、政治形式の変化を示した。こうした動きはヴォイヴォディナに留まらず、セルビア本土やモンテネグロにおける集会の拡大によって継承されていく。

### 2-3. 集会の拡大と他地域との連関

ヴォイヴォディナの諸集会は、上述の結果だけを見るなら、同自治州における影響力拡大や権限掌握という意味で、セルビア共和国党指導部にとって望ましい成果をもたらした。しかしながら、その青写真が最初から用意されていたかどうかについては議論が分かれる。従来の研究や著述では、ミロシェヴィチをはじめとした政治指導層の役割が強調され、一連の集会が上からの動員と組織化の産物であるとする見方が大半を占めた。しかし、本稿冒頭で触れたように、ヴラディサヴリエヴィチはこうした議論を批判し、コソヴォの活動家による草の根的な活動の展開を中心に、集会の参加者の主体的な参画に光を当て、下からの動員の側面を論じる<sup>(31)</sup>。そのような先行研究の知見を参照すれば、諸集会の展開は、予定調和のもとに進んだというより、コソヴォの活動家の「組織委員会」とその連携者、各地の集会組織者や参加者、セルビア党指導部、ヴォイヴォディナ党指導部といった関連する諸勢力、さらにその内部の諸関係など、様々な主体間の相互協力ないし緊張関係のもとに進行していったことが観察される。またそうした複合的で動的な過程は、次節で述べるように、組織と参加、要求や主張、動員に関する内的な変化を伴った。3か月以上にわたった一連の集会では、それらの変化が連なるなかで、最終的に自治州党指導部の辞職をめざす動きがもたらされたと見ることができよう。

もっとも、集会拡大の背景には、下からの参画や複合的な過程といった要因のみならず、セルビア共和国党指導部の決定が大きな影響を及ぼしたこともまた確かである。当時の集会をめぐっては、連邦ならびに共和国の党指導部間で賛否が分かれたが、9月5-6日に開かれたセルビアの共和国政府と党組織の合同総会において、ミロシェヴィチ率いるセルビア指導部は集会への支持を明確にし、尊重する姿勢を打ち出した<sup>(32)</sup>。これを受け、9月中旬から集会の数と規模は増大の一途を辿り、ひと月後の10月5-6日にノヴィ・サドの大集会が発生した。

31 Ibid. 同様に、ほぼ同時代（1990年）に著されたケルチョヴほかの研究（Kerčov et al., *Mitinz*）も下からの運動形成を議論する。

32 *Borba*, 07. 09. 1988, pp. 1, 3. また、Vladislavjević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 147-148.

他方、ヴォイヴォディナの集会拡大には、他の地域で生じた同様の動きも直接的ないし間接的に関係する。コソヴォの活動家は、7月9日のノヴィ・サド集会後、地元のコソヴォで抗議活動を継続する傍ら、8月20日にモンテネグロの首都ティトグラード (Titograd)<sup>(33)</sup>などで集会を組織し、さらに9月3日にはセルビア本土での最初の集会をスメデレヴォ (Smederevo) で開催した。こうしたコソヴォの活動家の行動に同調する形で、9月中旬、モンテネグロの複数の主要都市では、労働人民社会主義同盟などの地元組織が新たな集会を開催した。一方、セルビア本土では、当初はスメデレヴォのようにコソヴォの活動家と連携する形であったものの、その後はもっぱら共和国党指導部の支援と上からの動員に基づいて、各地で大小の集会が組織されていった<sup>(34)</sup>。このように、集会の組織化に関しては、コソヴォの活動家の「組織委員会」、各自治体の公的機関の主導、セルビア党指導部の支援や動員というように、地域や開催地、また時期によって異なる傾向が見られる。だが全体として一連の集会は、ヴォイヴォディナから、セルビア本土、モンテネグロの都市・町へと連鎖的に「飛び火」し、多発していく様相を見せた。

さらに大衆的な直接行動という観点では、各地の諸集会と同時期に発生した労働者のストライキも、共時的な文脈を介し、一定の影響を及ぼしたと言えるかもしれない。この時期、9月から11月のセルビアでは、毎月の発生数が2倍以上になるほど、ストが頻発した。なかでも10月4-5日、ベオグラード近郊の企業労働者約5千人が賃上げなどを求め、連邦議会前で実施したデモはとくに注目を集めた<sup>(35)</sup>。このストが首都ベオグラードで起きているまさにその時、北に100 kmほど離れた州都ノヴィ・サドでは、5-6日の大規模集会に至る事態が進行していた。またヴォイヴォディナ党指導部の辞職が決定した翌7日、今度はティトグラードを中心に、モンテネグロで労働者や学生を中心とする大規模なデモが発生し、数万の参加者が一部の指導層の辞職から賃上げ、学生の待遇改善までを要求する事態が10日まで続いた<sup>(36)</sup>。この1988年10月の数日間は、80年代末ユーゴスラヴィアの政局において、民衆の直接行動が劇的に都市をまたいで連続した一週間であった。

### 3. ヴォイヴォディナの諸集会の多面性と統一性

さて、以上概観した1988年夏からのヴォイヴォディナの諸集会において、ナショナリズムはどのような意味をもち、一連の展開にいかなる影響を与えたのだろうか。ここからは本稿の主題に即して、より詳しく諸集会の様相を検討する。まず本節では、集会の構成要素のなかでナショナリズムがどのような位置を占めたのか、全般的な構図を見たい。

先述のように、ヴォイヴォディナの諸集会、また一連の「反官僚革命」を扱った研究や著述では、従来、セルビア党指導部による上からの意図的な動員やナショナリズムに依拠した

33 社会主義期当時の名称で、現在はポドゴリツァ (Podgorica)。

34 Vladislavjević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 136-138, 148-150, 153-154.

35 数字は Ibid., pp. 155-157.

36 Ibid., pp. 160-163. デモは、非常事態宣言とともに治安部隊が介入するなかで幕を閉じた。だがこの当局の鎮圧が、共和国党指導部への不満と批判を増大させ、3か月後の翌89年1月10-11日、再びの大規模デモが行われると、ヴォイヴォディナと同様、指導部は総辞職するに至った。

手法が強調されてきた。実際、集会ではコソヴォにおける民族的同胞の苦境を前に、その解決として憲法改正が主張され、共和国の集権化が求められたように、そうした民族的ないし民族主義的な価値や思考への傾倒、またそれに対する共感が大規模な動員の背景にあったとされた。しかし、その背景を民族（主義）的な要因のみに求め、集会がナショナリズムに満ち満ちた場であったと見なすのは、一面的かつ早急な議論であろう。従来の研究でも、ケルチョヴほかとヴラディサヴリエヴィチの研究を中心に、そうしたイメージとは異なる様相を示唆するヴォイヴォディナの諸集会の実態や構造が、ある程度提示される。以下では、先行研究を活用しながら、諸集会の全般的な構図と特徴を整理し直し、そのなかでナショナリズムに関連する要素がどの程度支配的であったのかを把握する。集会とナショナリズムとの関係の大まかな輪郭を確認する作業として、集会の主体、目的と要求、動員の論理の観点から順に見ていく。

### 3-1. 集会の主体とその多様性

一連の集会は、ヴォイヴォディナの大小28の都市や町で起きた。集会の組織化の過程には、それぞれ固有の人的関係や動員の経路が存在したにちがいないが、本稿末尾の表に示されるように、各地の集会がどのような主体によって、いかなる人びとを集めて開催されたのか、その基本的な傾向を捉えることはできよう。

まず、組織化の主体として、その筆頭に挙がるのは、コソヴォの活動家を中心とする「組織委員会」である。「委員会」は7月9日のノヴィ・サドの集会に向けて形成され、その開催に成功すると、自治州内の他の場所でも抗議集会を行った。主として集会は、事前に予告をし、現地の協力者と調整や準備を進めつつ、当日はコソヴォから「委員会」を中心に一団が到来し、そこに協力者や支持者が加わるという形で実施された。しかし、「委員会」主導の集会は、9月3日のコヴィン（Kovin）が最後である<sup>(37)</sup>。その後「委員会」は、ヴォイヴォディナ各地の集会に参加、関与しつつ、セルビア本土やコソヴォで集会運営を主導した。

代わりに9月以降、ヴォイヴォディナの集会を主導したのは各地の地元住民であり、表のように、各自治体の公的機関を介して主催組織がつくられた<sup>(38)</sup>。その多くの母体となったのが、労働人民社会主義同盟（SSRN）、労働組合同盟（Savez sindikata –SS）といった社会政治組織（Društveno-politička organizacija –DPO）<sup>(39)</sup>である。ユーゴスラヴィアでは自主管理の理念のもと、高度の分権化が進んでおり、共和国と自治州のみならず、各地の地方行政にも大きな権限が委譲された。そのなかで、いわゆる自治体に該当するコミューン（opština）や、その下位の地域共同体（mesna zajednica –MZ）（コミューン内の各地区に相当）は、労働者の労働と社会生活の最も基礎的な単位として重要に位置づけられた。9月以降の集会の組織化を主導したのは、こうしたコミューンや地域共同体の社会政治組織であり、表に記さ

37 Kerčov et al., *Mitinzī*, p. 57. 表に示したように、「組織委員会」が組織した集会は、ノヴィ・サド（1回目）、パンチェヴォ、ティトヴ・ヴルバス、コヴィンにおける計4つ。

38 Ibid.

39 ユーゴスラヴィアにおいて労働人民たる人びとが政治的、社会的な活動を行う諸組織の総称。党組織の共産主義者同盟、その大衆組織である労働人民社会主義同盟、党青年組織の社会主義青年同盟、退役軍人会にあたる人民解放戦争闘士協会同盟など、様々な公的機関がここに含まれる。

れる通り、とりわけ労働人民社会主義同盟のコミュニオンや地域共同体における支部組織（それぞれコミュニオン協議会（Opštinska konferencija –OK）、地域協議会（Mesna konferencija –MK））は、多くの集会を組織したことが分かる。また先述のように、コソヴォにおける抗議行動や「組織委員会」の基礎となったのも、当地の労働人民社会主義同盟の人的関係であった。ここには少なくとも一連の集会において、自主管理の単位と公的機関の制度を用いて、当地の人びとが自ら集会を組織していく図式が見てとれる。

もうひとつ、集会開催の主体となったのは、地元の自主管理企業である。例えば、10月5-6日のノヴィ・サドの集会において、発端となったバチュカ・パランカの抗議行動を組織したのは、当地の企業「Majevisa」の労働者である。その後ノヴィ・サドに到着したこの一団に、工具製造企業「Jugoalat」など地元の諸企業の労働者が合流し、大規模な集会に発展した<sup>(40)</sup>。集会のなかには、地域によって、こうした企業単位で形成されるものが存在した。

次に、集会の参加者の様相を概観する。推定で50万を超える参加者の個々の実態を網羅するのは不可能であるが、参加者がどのような人びとによって構成されたかについて大まかに確認することはできるだろう。まず、アンケート調査に基づくケルチョヴほかの分析によると、参加者の中核をなしたのは、「組織委員会」の面々を含むコソヴォからのセルビア系住民に加え、その友人、親族、知人、またかつてコソヴォからヴォイヴォディナに移住した住民である。これらの人びとは、最初のノヴィ・サドの集会から絶えず参加し、会場の雰囲気づくりに精力的に貢献するなど、変わらぬ一定数をなした。一方、次第に増加したのは地元の参加者である。コソヴォからの同胞との連帯を支持したり、反官僚的な志向に共鳴したりした人びとであり、とくに後者の層は参加者のなかで支配的になった<sup>(41)</sup>。

続いて、参加者の民族的な構成について見たい。参加者の正確な数が存在せず、推定に基づく判断ではあるものの、前掲ケルチョヴほかによると、最大の参加者は、セルビア人とモンテネグロ人の民族帰属者、そしてユーゴスラヴィア人<sup>(42)</sup>の申告者である。そうした傾向は初期の集会でとくに見られた<sup>(43)</sup>。この点は、当初の集会がコソヴォの「組織委員会」によって主導され、コソヴォをめぐる民族間の関係が問題となったことから、もっともな傾向として考えられる。だが、ヴォイヴォディナが歴史的に多民族的な構成をもつとはいえ、当時の自治州人口の多数がセルビア人であったことに鑑みれば、全体の民族構成に合致した傾向を示してもいる<sup>(44)</sup>。いずれにせよ、ケルチョヴほかの調査結果は、全体として、一連の集会にヴォイヴォディナのすべての民族帰属者が参加したこと、そして集会の展開とともにセ

40 Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, p. 157; Kerčov et al., *Mitinzi*, p. 48.

41 Kerčov et al., *Mitinzi*, p. 53.

42 国勢調査で民族帰属を明らかにしない目的で用いられた区分であり、民族的帰属を意味しない。異なる民族籍の両親をもつ子、また超民族的な理念を志向する人びとなど、消極的・積極的双方の理由から申告され、ヴォイヴォディナのような民族混住地や都市部に多く見られた。

43 Kerčov et al., *Mitinzi*, pp. 53–54, 83–84.

44 1981年国勢調査におけるヴォイヴォディナ自治州の民族別の住民構成は以下の通り（単位：人）。自治州全人口203万のうち、セルビア人：111万（54.4%）、ハンガリー人：39万（18.9%）、ユーゴスラヴィア人：17万（8.2%）、クロアチア人：11万（5.4%）、スロヴァキア人：7万（3.4%）、ルーマニア人：5万（2.3%）、モンテネグロ人：4万（2.1%）、ロマ：2万（1.0%）、ルシン人：2万（1.0%）など。注27の国勢調査結果およびKerčov et al., *Mitinzi*, p. 30, Tabela 1参照。

ルビア人以外の民族帰属の参加者が増大し、その終盤にかけて参加者の民族構成は当時のヴォイヴォディナ全体における民族構成の比率にほぼ一致したことを指摘する。例外は、自治州の民族構成の割合よりも高い参加傾向にあったモンテネグロ人、その反対に低い傾向にあったハンガリー人であった<sup>(45)</sup>。

このような参加者の様相や民族的な構成を見る限り、集会の初期には、コソヴォ情勢を介した集会参加と民族的要因の連関が観察されるものの、その後の展開において、参加者の民族的な傾向に大きな偏りが見られるとは言えないようである。集会の組織化と担い手に関しても、コソヴォからの「組織委員会」だけでなく、労働人民社会主義同盟をはじめとする各地の社会政治組織や企業が重要な役目を果たした。したがって、一連の集会における組織と参加の主体に、ナショナリズムの強い関与や、あるいは民族的な要因の影響が見られるのは部分的であり、それよりもむしろ、他の複数の要因が関連した主体の多様性とその連動が特徴的であったと考えることができるだろう。

### 3-2. 目的および要求の複数性

次いで、様々な主体が関わった諸集会において、どのような要求や目的が掲げられたかを見たい。ケルチョヴほかは、アンケート調査で集めた発言、また集会の演説、横断幕、スローガン、唱和などの分析に基づき、最も重要な集会の目的として以下7つをまとめる。

- 1) 権利を奪われた〔コソヴォの〕セルビア人、モンテネグロ人との公の連帯、およびコソヴォにおける劇的状況の迅速な解決の要求
- 2) あらゆる分断の非難、そして友愛と統一、統一的なセルビアおよびユーゴスラヴィアに対する支持
- 3) セルビア共和国における憲法改正に対する支持、また連邦の他共和国とセルビアの平等性の確立
- 4) 官僚化した政策および行政当局（「安楽椅子族（foteljaš）」）に対する抗議、そして無能な官僚の機構および個人の交代要求
- 5) ヴォイヴォディナの「自治中心主義（autonomaštvo）」に対する抗議
- 6) 社会経済的、社会政治的な危機の問題解決、また国内全土における改革課題の実行の要求
- 7) セルビア社会主義共和国の党および共和国の指導部への支持<sup>(46)</sup>

このように集会では、組織と参加の多様な主体を反映し、様々な目的や要求が掲げられた。また多くの参加者は、そのほとんどすべての要求が実現されることを求めた<sup>(47)</sup>。

45 Kerčov et al., *Mitinsi*, pp. 54, 83–84. 参加傾向の高低が具体的にどの程度であったかは言及されていない。一方、その背景としてケルチョヴほかは、集会が開かれた都市・村の民族構成は、自治州全体と比べて、モンテネグロ人の比率が高く、ハンガリー人の比率が少ない傾向にあった点を述べる。また後者の低い傾向については、当時自治州に広く存在した抑圧の恐怖や、憲法改正が少数民族の言語や教育の権利をはく奪すると主張した自治州政府の喧伝による影響があったとする (Ibid., p. 54, n. 2, p. 84)。

46 Ibid., p. 66. [ ] 内筆者。

47 Ibid., pp. 66–67.

このうち、そもそもの集会の目的は1)である。それは先述のように、コソヴォの窮状をヴォイヴォディナの人びとに伝え、その問題への関心を喚起することであった。最初の7月9日のノヴィ・サド集会において、コソヴォから到来した「組織委員会」委員長ミチョ・シュパラヴァロ (Mićo Šparavalo) は、演説のなかで次のように述べた。「コソヴォのセルビア民族とモンテネグロ民族の民族的本性が完全に脅かされるこの瞬間……我々がやって来たのは、ヴォイヴォディナの連邦構成民族と少数民族を、民族的、宗教的な基礎によって破壊、分断し、混乱を持ちこむためではありません。そうではなく、コソヴォの経験をお伝えし、ヴォイヴォディナ指導部の行動が進められることの起こり得る結果を示すためです。その行動は、コソヴォのセルビア人とモンテネグロ人の劇的状況に際して、悪い方へ維持されているのです<sup>(48)</sup>。」発言にあるように、ここではセルビア人とモンテネグロ人の民族的な主体が明確に提示され、その上でコソヴォの実情と状況改善を訴える集会の目的が説明される。個々の集会では、これら民族に属する人びととの連帯が唱えられ、それぞれが「連帯集会」、あるいは民族名を明示して「コソヴォのセルビア人とモンテネグロ人との連帯集会」と名付けられた<sup>(49)</sup>。このように諸集会は、最初の発生から、コソヴォをめぐる民族間の図式と不可分の関係にあり、民族的な要因が大きく関与した。

他方、シュパラヴァロの発言には、ヴォイヴォディナ指導部に対する懸念や批判が表明されているものの、この時点では集会のなかで、4)のような人員交代をはじめ、最終的に実現した指導部の退陣は要求されていない。つまり7つの要求は、最初からすべて発せられたのではなく、集会が各地に拡大し、多発していく過程を通して、新たに付加されたり明言化されたりしながら複数化し、急進化していったと見ることができる。そこでは、1)のコソヴォ問題の解決をめざして、3)の憲法改正やセルビアと他共和国の地位の同等化がより明確に主張される一方、そうした方針に反対するヴォイヴォディナ自治州指導部への抗議が5)の「自治中心主義」批判とともに拡大した<sup>(50)</sup>。そして、6)のように経済問題や体制危機に対する諸改革が掲げられ、行政当局や企業経営層の官僚傾向を非難し、機構や個人の人員交代を訴える4)の要求が広がる。さらにこれらの要求とともに、そのほばいずれにも賛同する共和国党指導部への支持が高まり、それは7)の要求として現れた。

こうした要求の複数化や急進化が示すのは、集会の推移のなかで、民族的な要因に関連する要求が部分的となり、その分、民族的な要素が直接は結びつかない要求が新たに加わったことである。上記7つのうち、前者に相当するのは集会初期からの1、またそれを具現化した3(ないし5)であった。そしてこのことは、一連の集会が、要求の複数化や急進化のなかで、どのように方向づけられ、拡大していったのかを表している。コソヴォ問題の解決、セルビア人とモンテネグロ人の窮状といった特定民族が関与する主張は継続されつつ、次第に体制危機の打開、官僚批判、人員交代の要請といった、社会経済的な関心や権力関係に由来するより体制普遍的で一般的な問題が扱われるようになった。その意味で、非民族的な問

---

48 *NIN* (Belgrade), 17. 07. 1988 (no. 1959), p. 20 に引用される。

49 Kerčov et al., *Mitinz*, p. 66, n. 1.

50 「自治中心主義 (autonomaštvo)」は当時、74年憲法改正に反対し、自治州の権限保持を主張したヴォイヴォディナ党指導部を批判する軽蔑的な表現として用いられた。

題の参入を伴うそうした変化は、集会の進展や拡大と強く結びついていと捉えることができる。確かに当初、民族的な要因は集会の要求の中心にあり、その直接的な動機づけとなった。また逆に言えば、民族的要因に基づく最初の集会がなければ、一連の展開は生まれなかったとも言える。だが、その後の集会拡大における要求の複数化や急進化を踏まえると、民族的な関心やナショナリズムが関連する要因のみでは、集会がそのような規模にまで発展しなかったと考えることも可能であろう。その点は諸集会の動員の構造にも窺うことができる。

### 3-3. 動員の背景と論理

それでは、ヴォイヴォディナの諸集会に多様な主体と複数の要求が観察されるなら、そうした多面性のなかで、様々な参加者と個々の要求はどのように結ばれ、ひとつの運動を形成したのだろうか。本項では、集会における動員の背景と論理について見ておきたい。

まず、前項で見たように、一連の集会では、とりわけ初期において、「組織委員会」の関係者とその親類、知人などの一定の核となる参加者が存在した。こうした人びとの参画を支えたのは、血縁や地縁を介したネットワークである。そこでは、コソヴォのセルビア人とモンテネグロ人の友人、親族、知人という直接的な人的関係に加え、コソヴォからヴォイヴォディナへ移り住んだセルビア人やモンテネグロ人の入植者との連携が土台となった<sup>(51)</sup>。また入植者の役割に関しては、コソヴォからのみならず、国内の他の地域から入植したセルビア系やモンテネグロ系の住民が、集会の組織化と動員に少なくない影響を与えたことがしばしば指摘される<sup>(52)</sup>。これらの人びとは地元の中心的な活動家となり、その多くが集会に参加した。集会の発生地を見ても、その大部分は、入植者の相対的に多い土地に集中した。集会が開催された計28の都市と町のうち、入植者多数の地域、および先住者と入植者の混住地域に該当しないのは3つのみである<sup>(53)</sup>。

ヴォイヴォディナでは第二次大戦直後、この地域を去った多くのドイツ人、ハンガリー人に代わり、ボスニア・ヘルツェゴヴィナやモンテネグロなどの国内の経済的後進地域から20万以上の入植者が到来した。その約9割はセルビア人、モンテネグロ人の民族籍であり、これによって自治州の民族構成は変容し、セルビア人の数が全体の過半数を超えた<sup>(54)</sup>。一連の集会において、こうした戦後の入植者とその第二世代は、コソヴォの活動家の重要な同盟者となり、コソヴォからの到来者と地元住民の間を仲介し、集会の拡大と各地の動員に寄与した。その理由としては、民族的な同胞意識のほかに、入植者には第二次大戦中の民族間の紛争を経験した混住地域の出身者が多く、コソヴォにおける苦境への共感と同情が大きかった点が挙げられる。また入植者とその子孫は入植先で、元来の住民と比べて、経済的、政治的に相対的に低い立場にあることが多く、自治州政府への抗議を掲げる集会は、そうし

51 Ibid., pp. 52–53.

52 Ibid., pp. 58–59; Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 140–141 等。

53 Kerčev et al., *Mitinzi*, p. 59. ノヴィ・サド、スレムスカ・ミトロヴィツァ、チュルグの3つ。

54 Emil Kerenji, “Vojvodina since 1988,” in Sabrina P. Ramet and Vjerman Pavlaković, eds., *Serbia since 1989: Politics and Society under Milošević and After* (Seattle: University of Washington Press, 2005), pp. 352–353.

た境遇の不満を実際に表明する機会となり得た<sup>(55)</sup>。

このように見ると、集会の動員を支えた地縁や血縁および入植者の役割には、セルビア人とモンテネグロ人の民族的な紐帯や同胞意識が大きく関与していたことが分かる。しかし、動員の背景が必ずしも民族的な要因に限定されなかった点にも留意する必要があるだろう。例えば、集会の名称となった「連帯」の要求は、他の民族にも広く共有され得る超民族的な性格を備えていた。ユーゴスラヴィアでは国是の「諸民族の平等」のもと、主要な連邦構成民族と少数民族の平等が認められる。そうである以上、コソヴォのセルビア人やモンテネグロ人との連帯は、平等に認められたはずの権利を否定されたあらゆる民族との連帯としてもまた理解され、ヴォイヴォディナの他の民族にとっても十分共鳴し得るものであった<sup>(56)</sup>。集会参加者の民族構成が、自治州人口の割合に大方一致する傾向が見られるのも、こうした文脈が影響を与えていると捉えることができるだろう。

ところで、一連の集会において、とりわけ9月以降、その動員に大きく寄与したのが、反官僚の争点である。当時の集会は総じて「反官僚革命」と呼ばれたが、従来の研究や著述では、前述のように、セルビア党指導部の組織化とナショナリズムへの依拠が強調されるため、反官僚の問題が名目以上に扱われることはあまり多くない。だが、「反官僚」の言葉と概念こそ、集会の大規模な動員の背景を、文字通り、説得的に映し出すと言える。

元来、「官僚」ないし「反官僚」は、ユーゴスラヴィアの政治や経済をめぐる紛争に度々登場する概念である。その際、「官僚」が意味する対象は広く想定され、かなり便宜的に理解される。体制内では、政治指導層が行政の肥大化を減じたり、あるいは政敵を追放したりするために、官僚化を非難する宣伝活動が継続して起こった<sup>(57)</sup>。一方、ストや学生デモなど、指導部や体制への抗議運動のなかで官僚批判が展開される場合もある。こうして旧来から活用される反官僚の概念は、ヴォイヴォディナの諸集会において、様々な人びとの言動に親和的に作用し、そのほとんどすべてを支えることができた。そのメカニズムについてヴラディサヴリェヴィチは、主題の包括性と標的の一本化という2つの側面から説明し、集会における反官僚闘争の枠組みの重要性を指摘する。包括性とは、反官僚の主題が、「連帯」を唱えた当初の要求から、社会経済的な訴え、改憲、人員交代といった新たな要求までを包摂したことである。他方、一本化とは、包括された複数の要求を矛盾なくひとつに方向づけることである。当時の体制が抱える諸問題は、厳密にはそのすべてが連関するわけではない。だがそれらは、反官僚の枠組みを通して、官僚（制）の産物であると翻訳され、それによって一連の集会は、多様な要求とともに官僚との闘争に結晶化した<sup>(58)</sup>。

反官僚の枠組みが支持された背景としては、そもそも当時の体制下で官僚化傾向が実際に強まっていたことも挙げられる。自主管理とともに推進された分権化は、その理念とは裏腹

---

55 Ibid., pp. 61–63; Vladislavjević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 140–141. また、注45で言及した、諸集会におけるモンテネグロ人とハンガリー人の例外的な参加傾向は、以上の入植者の観点からも説明できよう。

56 Vladislavjević, *Serbia's Antibureaucratic*, p. 175.

57 Ibid., pp. 173–174.

58 以上、Ibid., pp. 170–176 参照。



に、権限を委譲された共和国、各地の自治体の官僚化を逆に進行させた<sup>(59)</sup>。それゆえに、自治州政府を退陣させた10月5-6日のノヴィ・サドの集会においてある労働者が語った次の言葉は、こうした反官僚の枠組みと文脈を端的に示唆する。「今日、絶対に重要な瞬間というのは、労働者階級が数十年前にはもっていたもの、しかし、その間に官僚が奪ってしまったもの、そういうもののために労働者階級が自ら闘う状況がやってきたことだ。言っておきたいのは、我々労働者は尊厳をもって抗議をしているということである<sup>(60)</sup>。」ここには、当初主張された民族的同胞との連帯は言及されていない。その発言は少なくとも、こうした人びとの参加や動員が反官僚の動機付けに支えられていたことを物語る。

このように反官僚の枠組みは、とりわけ集会が拡大し、多面的な様相を呈した時期において、さらなる動員を促しつつ、一連の集会に運動の一貫性を与える論理となった。その枠組みは、ナショナリズムとの関係で言えば、そもそも非民族的で民族的な価値と切り離されたものである。ゆえに、集会の拡大とともに反官僚闘争の側面が強まるほど、初期の集会を構成した民族的な要因は、反官僚の主題に包括されていき、諸集会にナショナリズムが占める要素は次第に低くなっていったと考えることができる。

このことは、本節で見た主体の多様性や要求の複数性ととともに、ヴォイヴォディナの諸集会の見取り図を提示する。上述のように、集会の組織と参加の主体に民族的な要因が与えた影響は部分的であり、また目的と要求の複数化のなかで民族的な価値に基づく要求は全体の一部となった。よって一連の集会の全般的な構図において、民族的な価値やナショナリズムが関連する要素は、諸集会を構成する不可欠な一部をなす一方、それは部分的で、支配的なものではない。数か月に及ぶ集会の展開において、確かにその初期では、集会の主体、目的と要求、動員の背景に民族的な価値やナショナリズムとの連関が確認される。だがその傾向は、集会が拡大し、その内容に非民族的な要素が増していくなか、相対的に顕著ではなくなった。そこで大規模な動員と運動の一貫性を与えたのは、非民族的な反官僚の枠組みであり、そのなかに民族的な要素も包含されたと把握することができよう。

#### 4. 諸集会とナショナリズム

ヴォイヴォディナの諸集会は、多面的な性格をもっており、従来強調されるナショナリズムの役割はそれほど目立つものでない。だがこのことはもちろん、ナショナリズムに関する問題が意味をもたず、周縁的であったという意味ではない。本節では、一連の集会のなかでナショナリズムや民族的な価値が関与し、問題となった個々の局面について検討する。具体的には、集会の展開と拡大において、ナショナリズムがどのように回避され、また逆に表現されたのか。そしてナショナリズムの問題はどのように理解され、議論の対象となり、そこでいかなる見解の対立が見られたのか。これらの点を順に考察していく。

59 Ibid., pp. 38-39.

60 *Borba*, 07. 10. 1988, p. 5. 同紙のインタビューに対する地元のケーブル製造企業社員(匿名)の回答。

#### 4-1. ナショナリズムの自制と集会の多民族性

ナショナリズムが全体として支配的でなかったことは、集会の組織者や参加者がそのような兆候が顕在化しないように意識的に配慮していたことも無関係でない。ナショナリズムはこの時代も例外なく容認されておらず、何より1980年代を通じて、コソヴォにおける一部のアルバニア人の動向は、ナショナリズムや分離主義への傾倒がもたらす現実的な危機として強く非難されていた。ゆえに、過度の民族（主義）的な言動が、予想外の批判や非難を呼び込んだり、集会自体に反体制的な性格付けが与えられたりするような事態は避ける必要があった。各地の集会は一定の形式のもとに進められており、そこからそれぞれの集会が何を伝え、また何を伝えないように意図されていたかが窺える。

はじめのうち、集会の進行は、その場の流れや即興に任せられたが、9月初旬頃から、一定の決まった様式と外観を備えるようになった。基本的には、まずユーゴスラヴィア国歌の斉唱によって始まり、続いて3つ、4つの準備された演説が行われ、最後にユーゴスラヴィア、セルビア、ヴォイヴォディナの政府高官に向けた書簡が読み上げられるという形をとった。演説者は、セルビア人活動家などのコソヴォの代表1名に加えて、労働人民社会主義同盟や労組同盟など、地元の社会政治組織の代表が務めた<sup>(61)</sup>。

集会による抗議行動は次第に対決姿勢を強めていったが、主催者側が常に慎重に配慮したのは、その行動が決して反体制ではないことを明示することであった。コソヴォの活動家にとって、集会をさらに拡大していく際の主な障壁は、政府当局の鎮圧であると考えられた<sup>(62)</sup>。そのため、集会の演説は絶えず穏健であるように意識され、会場は親体制的な様々な象徴で埋められた。体制への忠誠を強調する横断幕やプラカードが並び、同様の唱和が沸き上がり、ユーゴスラヴィア国旗や共産主義者同盟の党旗、ティトーの肖像写真が掲げられた<sup>(63)</sup>。集会が毎回ユーゴスラヴィア国歌で開始されたのも同じ理由からである。また集会の組織化が、前述の社会政治組織を介して進められたことは、それが体制内の回路を通して実施された活動であることの証左となった。

もっとも、こうした体制に忠実な傾向は、集会開催や要求実現のための戦略に過ぎなかったわけではないようである。親体制を象徴する行為のなかでも、とりわけ統一的なユーゴスラヴィアとその国家に対する支持、つまりユーゴスラヴィア主義の志向は、一連の集会を特徴づけるひとつの主張を構成した。それは体制による抑圧を回避するためというよりも、むしろ体制への抗議と集会開催の基礎にさえなっていた。ヴォイヴォディナ各地の地元で組織化に携わった関係者の多くは、統一的なユーゴスラヴィアの保持を強く望んでおり、集会による諸要求の訴えは、統一国家を土台にすると同時に、連邦国家の存続のための行動であった<sup>(64)</sup>。

61 Kerčov et al., *Mitinzi*, pp. 57–58; Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 166–167.

62 結果としてヴォイヴォディナの諸集会は当局の鎮圧を受けなかった。だが、集会の組織化に関わった一部の人は、連邦内務省から警告や聴取を受けたり、地元ないし自治州の党組織や労働人民社会主義同盟との間で問題が生じたりした（Kerčov et al., *Mitinzi*, p. 58）。

63 Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 141, 166. ティトー以外に、ミロシェヴィチの肖像写真も時に掲げられた。

64 Kerčov et al., *Mitinzi*, pp. 61–62. この点に関しては、前節で引用した諸集会の7要求の2)も参照。

一方、一連の集会では、親体制やユーゴスラヴィア主義の明示に加えて、集会が多民族的な行動であることも時に主張された。一例として、9月4日のツルヴェンカ（Crvenka）の集会を見たい<sup>(65)</sup>。ツルヴェンカは、自治州北西部に位置し、ヴォイヴォディナの多民族的な住民構成をもつとされた町である。集会は、地元の労働人民社会主義同盟の主導で開催され、近隣の街や村、またセルビア本土やコソヴォからの参加者を集めて、町の人口を超える規模となった。それはこの時期、ヴォイヴォディナの一連の展開において最初の多民族的な集会であると訴えられた。集会のなかでもその点が強調され、演説者の一人であるかつてのパルティザン闘士（セルビア系）は次のように述べている。「我々のことを、民族的な基礎に基づいて集まっているなどと誰も名指すことがないようにしよう。そうではなく、ツルヴェンカ人と呼ばれなくてはならない。なぜなら我々の土地は、多数の民族からなる人民（ナロード）の揺りかごであるからである。そして誇りをもって断言するなら、20を超える兄弟のような連邦構成民族と少数民族からなる家族だからである<sup>(66)</sup>。」

こうした多民族性の強調は、後述のように、自治州各地に広がりつつあった集会が当時、とりわけセルビア外において単一民族的であり、民族主義的であるとの批判に晒されたことに向けられている。実際、集会では労働人民社会主義同盟のハンガリー人幹部やルシン人の地元青年組織代表が演説を行い、会場にはハンガリー語、ルシン語、スロヴァキア語の横断幕も掲げられた。もっとも、ツルヴェンカの人口の民族的な構成比からすると、参加者の多数はセルビア人やモンテネグロ人であったと考えられる<sup>(67)</sup>。つまり、数の点で見れば、多民族的な構成の程度はそれほど高いものではなかった。だが、セルビア人が人口の過半数を占めつつも、少数の様々な民族が各地に集住し、点在するというのはヴォイヴォディナに広く見られる特徴である。その意味で、上の演説内の「20」という数字も単なる誇張でなく、集会の多民族的な構成が偽りであるとも言えないだろう。

しかしながら、全体的に見るなら、このような多民族的な傾向を示す集会の例が少なかったのもまた事実である。だが同時に、諸集会において他の民族へのあからさまな排除や分断が生まれたというような事例は確認されない<sup>(68)</sup>。また前節で見たように、ケルチョヴほかのアンケート調査は、参加の低い傾向を示したハンガリー人を含め、全体として、自治州内の様々な民族が集会に参画したことを示す。したがって、セルビア人が多数を占める多民族性というヴォイヴォディナの民族構成を反映する形ではあったものの、一連の集会は少なくとも多民族的な性格を備えていたと見なすことができるだろう。

65 以下、ツルヴェンカの集会については、*Borba*, 05. 09. 1988, p. 3; *Politika*, 05. 09. 1988, pp. 5-6; *Vjesnik* (Zagreb), 05. 09. 1988, p. 5 参照。

66 *Politika*, 05. 09. 1988, p. 6.

67 1981年国勢調査におけるツルヴェンカの民族別の住民構成比は、主な民族として、セルビア人：63.0、モンテネグロ人：16.2、ハンガリー人：7.2、ユーゴスラヴィア人：6.2、クロアチア人：2.9（単位：%）。人口は10,629人（注27の国勢調査結果参照）。また、集会に用いられた横断幕のハンガリー語には間違いがあることが、自治州内のハンガリー語新聞の記者によって指摘された（*Borba*, 08. 09. 1988, p. 4）。

68 例えば、ケルチョヴほかのアンケート調査において、集会演説者の民族構成では、セルビア人やモンテネグロ人が多数であるものの、そこにはアルバニア人を含めた他の民族が少なくとも含まれている。Kerčov et al., *Mitinz*, p. 57, Tabela 13.

#### 4-2. ナショナリズムの表出

一方、諸集会において体制内の行動であることが常に配慮されたとはいえ、個々の局面では、ナショナリズムの徴候を示す一派や言動が時に見受けられた。これは、集会の要求のひとつがコソヴォの民族的同胞との連帯であったこと、そして次第に集会を支配した反官僚の枠組みが極めて包括的であったことを考慮すれば、想像に難くない。

例えば、7月9日の最初のノヴィ・サド集会には、民族主義的立場の体制批判者として知られるセルビア文学者協会会長の詩人マティヤ・ベチコヴィチ (Matija Bećković)、極右的な反革命活動のかどでかつて禁固刑に処された社会学者ヴォイスラヴ・シェシエリ (Vojislav Šešelj) など、ベオグラードから駆け付けた著名な民族派の知識人や運動家の姿があった<sup>(69)</sup>。またこのほか、最初のノヴィ・サドの集会以降、各地の集会では絶えず民族的な価値の信奉者や排外主義者、反体制的な一派の参加が見られた<sup>(70)</sup>。

一方、参加者の言動が、ナショナリズムを彷彿とする行為として物議を醸す場合もあった。とくに注目を集めたのが、7月23日のパンチェヴォ (Pančevo) の集会に近隣のノヴァ・パゾヴァ (Nova Pazova) から参加した屈強な青年男子の行動である。この若者の一派は、長髪に顎ひげを蓄え、セルビアの伝統的な民族衣装の帽子シャイカチャ (šajkača) を被った格好で、市内でデモの隊列を形成し、地元の人びとを加えながら街中を行進した。その最中には、19世紀のセルビアの民族的な英雄として知られるニェゴシュ (Petar II Petrović Njegoš) やヴーク・カラジッチ (Vuk Stefanović Karadžić) の肖像画を先頭に<sup>(71)</sup>、〈団結のみがセルビアを救う〉〈我々は常にセルビアである〉などのポスターが掲げられ、「セルビア、セルビア」〈コソヴォは渡さない〉といった唱和が繰り返された<sup>(72)</sup>。

顎ひげにシャイカチャ帽の風貌は、この時代も現在も、第二次大戦中のセルビア王党派の勢力チェトニクが好んで用いた格好として知られる。チェトニクはセルビアのナショナリズムを信奉する集団として、戦後は一貫してパルティザンおよび体制の敵対勢力として位置づけられた。無論、顎ひげやシャイカチャ帽それ自体が問題であるということではない。しかし、このような集会やデモの公の場において、その格好や類似するイメージを示すことは、社会主義ユーゴスラヴィアの文脈では、チェトニクとの関連を疑われ、ナショナリズムの顕示やその類の志向を含意する行為となり得た。さらに、そうした身なりで、19世紀の民族復興期のスローガンである〈団結のみがセルビアを救う〉を掲げ、上述のような唱和を連呼することは、ナショナリストと見なされ得るのに十分な言動であった。

ノヴァ・パゾヴァの一派の行動は、集会の模様を伝えた国内外のメディアで大きく報じられた。海外ではロイター通信や AP 通信を通して、青年達の姿を収めた写真が流布し、国際的な誌面に載った。国内の報道機関では、その人目を引く身なりが取り沙汰され、政治的な

---

69 *Borba*, 11. 07. 1988, p. 3.

70 Kerčov et al., *Mitinz*, pp. 52–53.

71 前者は19世紀前半のモンテネグロの元首(ヴラディカ)で詩人。後者は近代のセルビア語の正書法を改めた言語学者で、文学者や歴史家としても知られる。どちらも民族史上、最も讃えられる知識人の2人である。

72 *Borba*, 25. 07. 1988, pp. 1, 3; *NIN*, 14. 08. 1988 (no. 1963), p. 22.

意味をめぐる論議を引き起こした<sup>(73)</sup>。その後も国内の報道媒体では、こうした青年のような民族的ないし民族主義的と見なされ得る行動が注目を集めた。とくに当地の党指導部が集会の動きを疑問視したヴォイヴォディナやモンテネグロ、また後にスロヴェニアやクロアチアの新聞・雑誌では、一連の運動を批判する材料として大きく取り上げられた<sup>(74)</sup>。

しかしながら、集会における言動や象徴がナショナリズムを意味するかどうかは、それらの現象をどのように解釈するかにも拠っている。確かに、チェトニクのイメージに類する格好は、当時の体制では、明確に民族主義的と見なされるものであった。だが、ユーゴスラヴィアの体制では、主な連邦構成民族の自決権に基づく連邦制のもと、民族的な権利や価値が基本的に認められており、特定の民族に言及する言動も一定程度許容されている。そのため、ニェゴシュの肖像画のように、民族の伝統や文化に即して何らかの表象が動員される場合、それは民族性の（排他的な）誇示というより、行動を彩り、共感を訴えるための象徴の活用として考えることもできる<sup>(75)</sup>。その意味で、(当事者にとって)民族的な表象が必ずしも民族主義的な含意を伴わなかったと判断することはできよう。

このように諸集会の個々の場面では、特定の政治的志向をもつ個人の参加やノヴァ・パゾヴァの青年一派の行動といった、ナショナリズムの表出を示す事実が確認される。しかし全体的に見て、過度に民族主義的な動向は周縁的な現象であったと考えられる。集会の規模が拡大するにつれ、こうした人びとの存在はより周縁化されていき、とくに9月25日や10月5-6日のノヴィ・サドのような大規模な集会において、ナショナリズムが大きな反響を呼ぶことはなかったようである<sup>(76)</sup>。とはいえ、ナショナリズムの表出の問題は、次項で見ると、集会の是非を問う国内の議論のなかで論点のひとつとなった。

### 4-3. 集会とナショナリズムをめぐる見解の相違

ところで、ヴォイヴォディナ各地で集会が広がっていく状況は、ユーゴスラヴィアの政治史上において、極めて例外的な事態であった。連邦ならびに共和国の党指導部は、その重大さを認識し、早い時期から集会発生の動きに対処しようとした。本項では、一連の集会に対する連邦や共和国の党指導部の反応を踏まえつつ、そこで浮き彫りになったナショナリズムに関する立場の違いについて検討する。

まず、党指導部の対応について、基本的な概観を示したい。党の最上位機関である全国的な連邦の党組織は、中央委員会を筆頭に、集会開催に対して批判的な態度を示し、その抑制を呼びかけた。一方、共和国・自治州の党組織の間には、集会の賛否について大小の姿勢の違いが見受けられた。そうした差異は、後述のような、集会とナショナリズムの問題に対す

73 *NIN*, 14. 08. 1988, p. 22.

74 事件の劇的な部分に着目するメディアの特性も影響し、少数のそうした言動が参加者の代表的な傾向であるように報じられたとする見方もある (*Vladislavjević, Serbia's Antibureaucratic*, p. 176)。

75 またパンチェヴォの集会では、ニェゴシュやカラジッチの肖像画とともにティトーの写真が掲げられた (*Borba*, 25. 07. 1988, pp. 1, 3)。ここには、象徴の利用においても、前節で見たような民族的な要素に反官僚の枠組みが加わる様相が確認される。

76 Kerčov et al., *Mitinz*, pp. 53, 160.

る見解の相違にも重なる。特筆すべきは、党指導部の間に意見の食い違いが生じただけでなく、それによって連邦党指導部の立場を二分する対立関係が現れたことである。そのなかで、ヴォイヴォディナやセルビアの各地で起こる集会は、対立の争点をなすのと同時に、党内の論議において自らの立場を表明し、対立する見解と勢力を非難する場としても機能した。諸集会の要求が急進化した背景には、このように集会が党指導部内の意見対立を代弁する機会になったことも大きく関係する。集会の演説や唱和において、組織や個人が名指して非難されることも珍しくなかった。また共和国や自治州の新聞・雑誌などの報道媒体も議論や対立の場となり、事態の過熱を生み出した。その結果、連邦党指導部内に顕在化する齟齬と対立は、党にとって新たな懸案のひとつとして認識され、体制の諸問題を抱える党内の議論や政策運営を阻害する要因となった。

さて、このような趨勢のなかで、集会をめぐる党指導部の議論は、連邦党組織の中央委員会<sup>(77)</sup>によって先導された。そこで全体の先鞭をつけ、党の基本的方針となったのが、同中央委員会幹部会が打ち出した「評価と姿勢」である。中央委幹部会は7月9日のノヴィ・サドの集会後、同12日の総会で初めてこの一件について議論し、「結集やデモ、また他の非民主的圧力の形態」が「政治的に非常に有害」であるとの見解を示した<sup>(78)</sup>。そして約1週間後の18-19日の総会では、9日の出来事の「原因と動機、その思想・政治的な結果、広範な公の反応、またそれらに関連して現れた対立と分裂」に関する包括的な評価がなされ、ここでの議論をもとに「評価と姿勢」がまとめられた<sup>(79)</sup>。この声明は、29-31日の連邦党中央委員会第16回総会に引き継がれて全会一致で採択され<sup>(80)</sup>、8月以降、集会が一気に多発した9-10月も含め、各地の諸集会に対する連邦党組織の公式の見解となった。

「評価と姿勢」を具体的に見ると、まず、抗議集会の結集の基本的な原因は、コソヴォのセルビア人とモンテネグロ人の状態、生活、安全に関する「克服されていない大きな困難」にあると言う。その上で、抗議集会とその余波については、「国内のいかなる地域であれ、いかなる動機であれ、非民主的な圧力やデモによって、……累積した慎重を期する社会問題を解決することはできない」と述べられ、集会という手段がはっきりと批判される。一方、党組織や新聞媒体においては、集会発生の「あらゆる側面」と「複雑な目的と結果」に目を配り、全体として評価する必要性が訴えられる。これは、集会をめぐる対立の過熱要因として、原因や結果の複雑さが軽視され、一面的で一方的な評価がなされたことを問題視するためである。ゆえに、そうした偏った見方や対立の助長を直ちに停止し、党組織間の相違と不和を解消することが要請され、とりわけセルビアとコソヴォの党指導部に対して、「予告される新たな大衆的な結集や他の地域への到来を防ぐ必要性」が警告される<sup>(81)</sup>。

「評価と姿勢」には、集会発生とナショナリズムに関する見解も窺える。それによると、

---

77 正式には、ユーゴスラヴィア共産主義者同盟中央委員会。連邦党組織の最高意思決定機関。

78 *Borba*, 14. 07. 1988, p. 5.

79 *Borba*, 20. 07. 1988, p. 1; *Borba*, 21. 07. 1988, pp. 1, 3. 正式には、「7月9日のノヴィ・サドにおけるコソヴォのセルビア民族およびモンテネグロ民族に属する市民の到来と抗議集会に関する評価と姿勢」。

80 *Borba*, 01. 08. 1988, p. 2; *Borba*, 09. 09. 1988, p. 5.

81 以上、*Borba*, 21. 07. 1988, pp. 1, 3.

抗議集会の組織化や表現方法には、コソヴォの情勢やセルビア人とモンテネグロ人の状況とは本質的に関係のない「別の動機」が存在した。集会では実際、事態の急進化を目論む「著名なナショナリスト」の試み、政治的な圧力や緊張化を狙った過激な個人や団体の明確な意図などが見られ、それらが元来安定したヴォイヴォディナの民族間関係に「不運な結果をもたらし得る」ことが危惧される。ここで批判されるのは、集会に伴うナショナリズムや反体制的な徴候であり、それは集会開催への懸念と批判とは明確に線引きされている。そこには、コソヴォの「困難」に言及し、集会の原因に一定の理解を示すような姿勢は見られない。この点は、出来事を総合的に判断する必要性とともに強調され、「正当化される要求や抗議を民族主義的な操作や欺瞞から明確に区別する」ことが訴えられる<sup>(82)</sup>。

しかしながら、「評価と姿勢」が連邦党組織の見解であったとはいえ、集会発生とその後の事態をめぐるのは、共和国と自治州の党組織間に大きな隔たりが生まれた。そうした相違や対立の関係を端的に示すなら、一方で、「評価と姿勢」を支持するヴォイヴォディナ、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、スロヴェニアの党指導部、他方で、集会開催を積極的に支持するセルビアの党指導部という構図が描出される<sup>(83)</sup>。なかでも、7月9日のノヴィ・サドの集会直後に顕在化したのが、ヴォイヴォディナとセルビアの党指導部の対立である。とくに同13日から15日にかけて、双方が自身の委員会総会を通じて互いに非難を応酬する状態が生じた<sup>(84)</sup>。「評価と姿勢」で党組織間の不和の解消が求められたのも、直接にはこの両者の論争の激化が背景にある。だが、セルビア共和国内で先鋭化した集会をめぐる対立関係は、その後、連邦レベルに拡大し、共和国間の次元においても見られるようになった。その重要な契機となったのが、8月30日の連邦党指導部の通達である。通達は、連邦の党中央委幹部会が同日の総会后、共和国と自治州や軍の党組織などに向けて送付し、各党指導部に、依然として続く抗議集会や新聞媒体を介した名指しと非難について評価を行うことを要請したものである<sup>(85)</sup>。これを受け、各共和国党指導部は幹部会の会合を開いてこの問題を討議し、9月初旬には共和国ごとの党の立場が明示されていった。

共和国党組織が発表した個々の声明を見ると、そこには集会発生をめぐる立場の相違が如実に映し出されている。上述の構図のように、西のスロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの党指導部は、「評価と姿勢」に同調したり、一致したりする立場を示し

82 Ibid.

83 モンテネグロとマケドニアの党指導部に関しては、どちらもアルバニア人を共和国内に抱えることからコソヴォ問題を懸念し、セルビア党指導部や憲法改正を支持する傾向が見られた。だが集会開催をめぐる、前者は個人によって見解を異にしたり、後者は明言を避けたりした (Vladislavljević, *Serbia's Antibureaucratic*, pp. 128–129)。

84 *Borba*, 18. 07. 1988, pp. 1, 3; *Borba*, 19. 07. 1988, p. 3. 前述の12日の連邦党中央委幹部会総会では、「7月9日」の当事者であるセルビアおよびヴォイヴォディナとコソヴォ両自治州の党指導部に、抗議集会について評価、報告し、18日の総会まで論争を控えることが要請されたが、事態は逆の方向へ進んだ。

85 “Kako se na raznim skupovima i u brojnim diskusijama proteklih dana ocenjivala aktuelna politička situacija u zemlji” (以下、“Kako se na raznim skupovima”) (3), *Borba*, 09. 09. 1988, p. 5. 背景には、7月末の「評価と姿勢」の採択後、8月に入っても集会と論議が収まらず、事態が混迷に向かい始めていた状況がある。

た<sup>(86)</sup>。このうち、スロヴェニアの党中央委幹部会は、不満表明の形態として集会に一定の理解を示しつつ、そうした行動が「いかなる思想的、政治的出発点から組織され、またそこでの人びとの操作が議論となっているかどうか」を判断する必要性を訴えた<sup>(87)</sup>。対照的に、クロアチアの党指導部は、集会の行動に直接的に反対する姿勢を示した。9月1日のクロアチア党中央委幹部会の拡大総会では、「評価と姿勢」に一致して、「党の諸組織と指導部が、民族的基礎に基づく政治的な結集の無力化に向けて、緊急かつ活発に行動することが不可欠である」ことが主張された。なぜなら、そうした結集が、コソヴォの「実存的、人間的、また民族的な問題の解決」にも、アルバニア人のナショナリズムや分離主義の攻撃を除去することにも貢献せず、逆に「民族主義的な熱情および反社会主義的な行動や振る舞いを焼き付ける雰囲気をつくり出す」と評価されるためである<sup>(88)</sup>。

より厳しい反対を示したのはボスニア・ヘルツェゴヴィナの党指導部である。9月1日の共和国党中央委幹部会の総会では、「評価と姿勢」に代表される連邦党中央委の立場が明らかかな拒否や個別的な軽視を受け、連邦党組織の権威と正統性がなおざりにされる現況がはっきりと言及され、問題視された。その上で、昨今の国内の政治関係に幾つかの「並行的な中心」が現れている状態を危惧する。そうした動きは「労働人民や市民による合法的な自主組織化の形態」ではない。コソヴォの活動家の「組織委員会」はその最たる例であり、「民族的基礎に基づく結集」は、「客観的に」見て、現状の諸問題に取り組む共和国内の諸組織、人びと、諸民族の「連帯に対する攻撃」であると強く非難された<sup>(89)</sup>。

加えて、明確に異を唱えたクロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナの党指導部にとって、集会開催の問題は、ナショナリズムをめぐる動向とその認識にも深く関わる争点であった。それは双方の総会においても明言されている。クロアチアの党中央委幹部会は、「民族的な基礎に基づく目に見えて民族主義的な綱領と均質化」が具現化されるなかで、「ナショナリズムの拡大がユーゴスラヴィアの民族間関係における安定を危険に晒し、クロアチア共和国内においてもその影響がある」との見解を示した<sup>(90)</sup>。一方、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの同幹部会は、「国内における民族関係の緊張化とナショナリズムの拡大が、共和国内の共産主義者、またすべての労働人民、市民のとりわけ懸案となっている」と評した<sup>(91)</sup>。

特筆すべきは、2共和国の党指導部が、集会の組織化への反対を訴える際、いずれも「民族的基礎に基づく」という表現によって集会を性格づけていることである。集会が民族的基礎に基づくか否かについては、当時、党指導部の間で議論が分かれており、「評価と姿勢」

86 「評価と姿勢」に対する各共和国党指導部の見解の特徴と相違については、次も参照。“Kako se na raznim skupovima” (5), *Borba*, 10–11. 09. 1988, p. 5.

87 *Borba*, 08. 09. 1988, p. 4 にまとめられた「コソヴォの状況の解決に関するスロヴェニア共産主義者同盟中央委員会幹部会の評価と姿勢」(同幹部会が9月1日に採択) 参照。スロヴェニアでは、同年6–7月にかけてリュブリャナを中心に、軍事裁判(いわゆる「四人裁判」)に抗議する集会や署名運動などが拡大した。共和国党指導部はこの動きを基本的に支持しており、ここでの見解も集会自体ではなく集会が組織される背景に問題の中心を向ける。

88 *Borba*, 07. 09. 1988, p. 3. 1日の拡大総会をもとに5日に発表された声明の内容より。傍点筆者。

89 *Borba*, 03–04. 09. 1988, p. 6 で報じられた1日の総会の声明参照。傍点筆者。

90 *Borba*, 07. 09. 1988, p. 3.

91 *Borba*, 03–04. 09. 1988, p. 6.



でもとくに言及がない。だが、少なくとも両共和国の党指導部の見解では、集会の組織化はセルビア人に基づく結集であると把握され、その点が強調された。どちらの共和国も、領域内にはセルビア人の居住する混住地域が存在する。民族的同胞の観点からすれば、セルビア共和国の動向が、隣接するこの2共和国のセルビア人に何らかの影響を及ぼす可能性は想定に難くない。ゆえに、ヴォイヴォディナやセルビアで進行する事態のなかで、単一の民族的基盤をもつ集会を許容することは、それ自体が自共和国内の民族間関係の悪化やナショナリズムの増長を促し、またそもそも、諸民族の平等に代表されるような統一国家の価値観に反する行為として、非難されるべき状況であると見なされた。

他方、集会の当事者であるセルビア共和国の党指導部は、全く正反対の立場をとり、連邦党組織の「評価と姿勢」に対しても批判の矛先を向けた。第2節で見たように、9月5-6日のセルビアの党中央委幹部会と共和国幹部会による合同総会は、一連の集会への支持を打ち出し、ヴォイヴォディナやセルビアにおける集会拡大を後押しした。この合同総会は、他の共和国党指導部と同様、8月30日の連邦党指導部による先述の通達を受けて開かれたものである。会議では2日に及ぶ議論を経て、両幹部会による「姿勢」が採択された<sup>(92)</sup>。「姿勢」では、ヴォイヴォディナにおける連帯の諸集会が、国の安全を危うくする「危険なデモや非民主的な圧力として断言されること」に強く異議が唱えられ、「集会が原因、動機、内容に関係なく非難され、禁止される」のは政治的に受け入れられないと明言される。なぜなら、「ユーゴスラヴィアの安全を危うくしているのは、何よりもコソヴォの反革命であって、それに反対して現に開催されている諸集会ではない」からである。集会はコソヴォをめぐる問題が生み出したのであり、それ自体が問題の本質ではないとの認識が示された。

合同総会ではナショナリズムに関しても触れられている。「民族的基礎に基づく対立の危険性は、ひとつの具体的な事例や情勢においても過小評価してならない」。そこでは、集会の単一民族性が論議を呼んだことを念頭に、このように強調されながら、他の共和国指導部と同様に、民族主義的な傾向に対する厳しい立場が明示される。もっとも、一連の集会はそうした傾向とは明確に線引きされるものである。これまで開催されたすべての集会は、「指導部や機関に対して、友愛と統一および階級的、民族的な平等の政策の効果的な実行を求める力強い要求」を表している。それは、反共産主義や民族主義の敵対的な姿勢を表明し、党の政策とは反対の解決策を提示するような個人の孤立した試みとは関連がない。そして、クロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの党指導部が指摘する「民族的基礎に基づく」集会の性格に関しても反論がなされる。合同総会最後のミロシェヴィチの演説では、集会参加の背景には、人びとが脅威や攻撃を受けるそもそもの民族的な枠組みが関与している点が述べられ、集会にはヴォイヴォディナのすべての連邦構成民族と少数民族が参加し、それは単一民族的ではなく多民族的な構成をもつ事象であると主張された<sup>(93)</sup>。

92 以下、「姿勢」の内容については、*Borba*, 07. 09. 1988, p. 2 参照。引用も同じ。

93 ミロシェヴィチによれば、「……人びとが結集するのは、この人びとが攻撃され脅かされる枠組みに基づいてのことである。虐げられるのはセルビア人、モンテネグロ人としてであり、セルビア人、モンテネグロ人として移住ないし保護される。……とりわけヴォイヴォディナにおいては、そこでは大規模な集会にヴォイヴォディナのすべての連邦構成民族と少数民族に所属する人々が出席しており、……多民族的であることが広く表れている」(*Slobodan Milošević, Godine raspleta* (Belgrade: BIGZ, 1989), p. 260)。

このように、ヴォイヴォディナを中心に拡大する諸集会に対して、連邦党中央委を中心に早くから対応と協議が進められたが、集会の評価をめぐることは、連邦および共和国・自治州の党指導部の間で異なる見解が見られ、その是非についても意見が割れた。連邦党中央委幹部会の「評価と姿勢」によって統一的な立場が示されるものの、それに対する共和国・自治州党指導部の立場が一致せず、議論はすれ違い、対立が明らかとなる。そこでは、集会の評価のみならず、集会拡大とともに危惧されるナショナリズムについても齟齬が生じた。集会に反対するクロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの党指導部は、集会が「民族的基礎に基づく」点を問題視し、その開催が民族間関係の悪化やナショナリズムの拡大を招くことを非難する。一方、集会を支持するセルビア党指導部は、集会が多民族的に構成され、党の方針に基づいて政策の効果的な実行を求める行動であると主張した。

#### 4-4. 「ナロード」の主体をめぐる評価とナショナリズム

それでは、共和国党指導部の間に見られるこうした見解の違いは、何に由来しているのだろうか。ヴォイヴォディナ各地で発生する同一の事象について、一方は、「民族的な基礎」に基づき、「ナショナリズムの拡大」をもたらす行動として非難し、もう一方は、多民族的に構成され、体制論理に則った正統な行為であると支持する。その違いを生み出した背景として考えられるのは、集会の主体についての性格づけであり、それをめぐる解釈の仕方である。本節の最後では、諸集会の主体をなしたナロードが当時どのように位置づけられていたかを検討する。それを通して、一連の事象が少なくとももたらした政治的な力学の当事者および当該社会における意味の違いについて考察したい。

7月9日の最初の集会から約ひと月後、8月12日のノヴァ・パゾヴァでは、ヴォイヴォディナにおける3番目の集会が開かれた。その模様について、セルビアの主要週刊誌は次のように報じる。「ここでは、皆が複数形で語る——「我々は求める」、「我々は要求する」、「我々は提案する」といった具合に。まるで一人が、その他の者が何を望み、考えているかを知っているかのようなのである。最も頻出する言葉がナロード (narod) である。1日のあいだにこれほど何度も「ナロード」が繰り返されるのを聞いたことがない……」<sup>(94)</sup>。この記述が示すように、集会に人びとが集まり、共通の行動を起こすとき、その集団を指示し、行動の主体を明示する言葉となったのがナロードである。

そもそもナロードは、社会主義ユーゴスラヴィアの主体をなす重要な概念である。憲法条文にも明記され、国家の体系と諸制度を担う政治的主体の基礎として位置づけられる<sup>(95)</sup>。ただし、原語の「ナロード」は複数の概念を内包する。外国語に翻訳される際に、文脈に

94 *NIN*, 21. 08. 1988 (no. 1964), p. 10.

95 例えば、最初の1946年の憲法には次のようにある。( )内は原語。「第一条 ユーゴスラヴィア連邦人民共和国は、共和国形態の連邦人民 (narodna) 国家であり、分離権を含む自決権に基づき、連邦国家に共同して生活する自らの意思を表明した平等な諸民族 (narod) の共同体である」。また「第六条 ユーゴスラヴィア連邦人民共和国においては、すべての権力は人民 (narod) に由来し、人民 (narod) に属する。……」(Branko Petranović and Momčilo Zečević, eds., *Jugoslavija 1918–1988: tematska zbirka dokumenata*, 2nd rev. and enlarged ed. (Belgrade: Rad, 1988), pp. 783–784)。

よって異なる訳語が与えられるように、大まかに言って、「民族」と「人民」の2つの政治的概念を意味する。前者は、一般的な意味での民族、とりわけ連邦の構成主体である主要な南スラヴの5ないし6の民族<sup>(96)</sup>を指す。ユーゴスラヴィアの多民族性を踏まえ、通常はこちらが参照されることが多い。他方、後者は普遍的な意味での人間集団を指し、英語の「the people」にあたる。多くの社会主義体制で、「労働者」と並ぶ政治的主体として広く用いられるように、この国でも体制を担う普遍的な主体を表した。前者とは対照的に、脱民族的な含意があり、その意味で、国内の多様な諸民族を横断・包摂し得る概念となり得た<sup>(97)</sup>。

このように政治的主体として体制の基礎に位置づけられたナロードは、ヴォイヴォディナの諸集会において、集まった人びとの主体を表す概念として機能した。そしてその際、ナロードが併せもつ民族のおよび人民的な概念は、そのどちらもが集会行動の主体をなすことに寄与したと考えることができる。例えば、第3節で引用した「組織委員会」委員長シュパラヴァロの演説<sup>(98)</sup>では、集会の目的や意図が訴えられながら、セルビア人やモンテネグロ人の民族的な主体が明示される。そこでは「セルビア民族(narod)とモンテネグロ民族(narod)の民族的本性が完全に脅かされるこの瞬間」というように、ナロードが民族的概念を意味する形で登場する。

一方、前述した9月4日のツルヴェンカの集会において、近隣のソムボル(Sombor)から参加したある女性は、次のように述べた。「私はクロアチア人で、夫はセルビア人、子どもはユーゴスラヴィア人。……指導部にこう伝えたいわ。まだ遅くないのなら、人民(narod)の声を聞きなさい。人民(narod)には忍耐がある。コソヴォの状態が変わるのを私たちは8年も待ってきた。私の子どもが自由であるように、コソヴォの子どもたちもそうなるように願いたいわ」<sup>(99)</sup>。ここでのナロードは、民族的な枠組みというよりも、より普遍的に人民的な意味内容を指して言及されている。同様に、人民的なナロードの例として、ヴォイヴォディナ党指導部の退陣を迫った10月6日のノヴィ・サドの集会では、地元企業から参加したある男性労働者はこう述べた。「この集会には多くの変化のための決定的な特徴がある。指導層の交代を求める……。労働者全員は同じことを考えている。指導部は人民(narod)とともにいなかったと」<sup>(100)</sup>。こちらのナロードは、先の女性の主張と比べれば、その普遍性が多少狭まり、指導層との対比を念頭に置いて、人民的な主体が掲げられる。

これらの発言に見られるように、諸集会においてナロードは、民族ないし人民のどちらかの意味に限定されることなく、複相的に、また時に重層的に、2つの意味概念を携えながら集団行動の主体となり、一連の運動を肉づけた。その際、ナロードの主体が、複数の概念に分化されず、それぞれの文脈に応じて民族的ないし人民的に解釈され得たことは、広範な動員を生み出す上で少なくない意味をもったと言えるだろう。また第3節で見たように、集会

96 建国以来のスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、モンテネグロ人、マケドニア人に加え、1968年に民族として承認されたムスリム人。

97 またより広く、「人民」の日常的で素朴な意味合いとして、「民衆」「民」「(集まった)人びと」などの意味もある。

98 本稿80頁第1段落参照。

99 *Politika*, 05. 09. 1988, p. 6の集会の取材記事より。

100 *Borba*, 07. 10. 1988, p. 5同紙のインタビューに対する回答。

の展開とともに組織と参加の主体が多様化し、要求と主張が複数化していくとき、普遍的な人民的ナロードは、糾合する人びとの唯一の共通項となり得た。その人民的な主体は、先述の反官僚の枠組みに親和的に連なりながら、集会の多様性と複数性をとりまとめ、包括的な動員へと方向づけることに寄与したと考えられる。

ただし、ナロードが民族および人民の概念を併せもった一方で、ナロード自体がそもそも分化されない単一の政治主体であったことにも目を向ける必要はあろう。上で見たように、その複相性を念頭に、ナロードが集会における個々の局面で何を含意し、あるいはどちらの概念的比重を占めたのかについて考察することは可能である。実際、文脈や局面に応じてその意味に違いが見受けられた。しかし一連の集会の展開において、人びとが結集する主体を一体的に捉えるなら、ナロードがひとつの総体として現れ、またそのようにこの主体が認識される様相を確認できるのもまた確かである。

本項冒頭に引用した週刊誌のように、当時の国内の新聞・雑誌が伝える報道には、「ナロード」の語がしばしば登場する。それは次第に、集会の拡大とともに、ひとつの社会現象を描写し、形容するような意味を伴い、運動全体を特徴づける象徴性をもった。7月当初の散発的な状態から、9月に入って集会の数と発生地が一気に増大し、本稿末尾の表が示すように、ヴォイヴォディナ各地で何千、何万の人間を集めた出来事が連日発生する様は、それ自体、主体であるナロードが次々と立ち上がり、声を上げていく形勢を明瞭に印象付けた。人びとの結集が事件のように沸き起こる様子は、「ナロードの発現 (dogadanje naroda)」とも言い表され、それは後に「反官僚革命」とは別に、このヴォイヴォディナから始まったセルビアにおける大衆運動の連鎖を指示する言葉となった<sup>(101)</sup>。

このようにナロードが複数の意味を携えながらも、一連の展開においてひとつの中心的な総体として立ち現れるとき、あらためて確認しておきたいのは、ナロードが勃興するこうした状況が、連邦の政治関係のなかでどのように捉えられたのかという点である。事態はヴォイヴォディナを中心にセルビア共和国の領内で進展しており、連邦レベルに鑑みた場合、それは全国的な現象というより、基本的に共和国内部の出来事であった。ナロードの現象およびその主体についての捉え方には、共和国の内外で温度差があり、賛否もはっきりと分かれたと見ることができるだろう。

前項で述べたように、クロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの共和国党指導部の見解において、一連の集会は「民族的基礎に基づく」結集であると強く批判された<sup>(102)</sup>。そこでは、集会におけるナロードが、民族と人民の2つの概念を内包し得るとはいえ、もっぱら民族的概念の意味で理解されたことが分かる。もちろん背景には、当時の連邦制の構造上、連邦の

---

101 この表現自体は、文学者M・ヴィテゾヴィチ (Milovan Vitezović) の演説の一節に由来するという。11月19日、ヴォイヴォディナから始まった一連の集会の流れを受けて、130万人もが参加する大規模集会がベオグラードで開催された。そこでヴィテゾヴィチは群衆を前に次のように述べた。「親愛なるナロードよ、我々の歴史は今年、ナロードが発現した年として記憶されるだろう」(傍点筆者) (Ivan Čolović, “Sve je počelo u Srbiji?” in Ivan Čolović, ed., *Zid je mrtav, živeli zidovi! pad Berlinskog zida i raspad Jugoslavije* (Belgrade: Knjižara Krug, 2009), p. 40)。

102 「民族的基礎」の原語は「nacionalna osnova」。ここでは「narod」ではなく、英語の「nation」に相当する「nacija」の派生語が用いられる (*Borba*, 07. 09. 1988, p. 3; 03-04. 09. 1988, p. 6)。

政治的議論では、しばしば共和国ないし民族間の関係が想定され、ナロードも基本的に民族的含意をもつ傾向にあったことが少なからず影響する。だがいずれにせよ、ナロードの沸き上がる様相は、セルビアの民族的な主体の発揚の場として少なくとも理解された。すなわち、セルビア以外の多くの共和国において、ナロード率いる一連の集会は、特定の民族を主体とする運動であり、連邦内の秩序や民族関係、当時の諸問題の解決にとっての脅威となった。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ党指導部が、集会開催について、同共和国の組織や人びとの「連帯に対する攻撃」であると非難したのもこのためである。またそれゆえに、クロアチア党指導部にとって、ナロードを掲げる広範な結集は、「民族的な基礎に基づく均質化」であり、「ナショナリズムの拡大」であると警戒をもって捉えられた<sup>(103)</sup>。

しかし他方、ヴォイヴォディナ各地をはじめ、一連の集会の当事者であったセルビア共和国において、ナロードの主体は、民族的概念のみならず人民的概念を兼ね備え、複相的に構成されるものであった。それは上述のように、実際の集会において、双方の位相を併せもつと同時に、いずれかに限定されることのない未分化の主体として作用し、また実践される。そして、そうした複合的な主体がもつ汎用性は、集会の動員に大きく寄与した。その際、集会が各地に広がるなかで、包括的な動員をとくに後押ししたのは、人民的概念である。より普遍的なその概念は、反官僚の粹組みとも親和的に作用しつつ、人びとを糾合し、内部の多様性・複数性をまとめ上げた。そのなかで、他の共和国が批判を向ける民族（主義）的な傾向は後景に退き、またセルビア人以外の参加者も少なからずその場に加わるという状況は、確かに存在し、諸集会の一端を形成する。そうであるがゆえに、セルビア党指導部の見解では、集会の単一民族的な傾向を指摘する非難が拒否され、その反証として諸集会の多民族的な構成が主張された。

もっとも、ナロードの主体をめぐるこのように相反する見解は、どちらも従来までの体制論理に則って提示されており、その意味ではいずれも正しく、いずれも間違いではないと考えられる。そもそも当時の体制において、ナロードの主体が民族なのか、あるいは民族に限定されない複合的な概念なのかを判断するような、何らかの基準が定まっていたわけではない。どちらかの「正しさ」を決めるには、政治的な判断に依拠する可能性も考えられ得るが、先の「評価と姿勢」を含む連邦の党指導部内の議論においてそうした判断はなされなかった。相互の見解の相違は、一連の集会におけるナロードをどこに力点を置いて理解するかという解釈の問題に委ねられ、平行線を辿った。そしてその問題は、集会とナショナリズムに関する評価に結びついており、ナショナリズムをめぐる議論でも双方の見解は食い違い、対立する。

しかしながら、集会に対する評価は異なったものの、一連の集会がもたらし得る影響力については、双方の間である程度の認識が一致していたと言えるかもしれない。つまり、ナロードの主体が何を含意するかに問わず、運動の拡大を通じて政治的な一体化が進行し、まるでナロードが沸き立つように集団の全的な方向づけが生み出されていたことは、セルビアの内外において確かな現実であった。そうした一体化を生み出す力学は、各地の結集とともに強化され、さらなる運動の高揚感とともに、社会全体の政治的な凝集化を進めていった。そし

103 *Borba*, 07. 09. 1988, p. 3. 注90にかかる引用も参照。

てその過程がセルビア共和国の内部でまさに起きている。これこそが、クロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの党指導部をはじめ、他の共和国にとって、一連の集会が脅威と映り得る理由であった。

この点について示唆的なのが、最大規模となった10月5-6日のノヴィ・サドの集会における、ケルテース・ミハイの演説である。ハンガリー系の出自をもつケルテースはバチュカ・パランカの党支部委員であり、自治州党指導部から当地の集会における演説の責任を問われた2名のうちの一人として、バチュカ・パランカからノヴィ・サドに展開した大集会の中心を担った<sup>(104)</sup>。ケルテースが引責を迫られたのは、「評価と姿勢」に基づく当時の連邦党指導部の方針に反し、同2日の演説のなかでヴォイヴォディナ党指導部の面々を名指しで厳しく批判したことであった。だが5日のノヴィ・サドの集会では、次のようにも演説する。「……今私は、ヴォイヴォディナの指導部に対してこう言ったことを非難される。「私がハンガリー人としてセルビアを恐れないのに、どうして皆さんは〔セルビアを〕恐れるのか」と<sup>(105)</sup>。」ここには、それが演説中の比喩や誇張であれ、ハンガリー人として参加するケルテースが、一連の集会をどう捉えていたかを記す一例が提示されている。少なくとも文言が示す限り、諸集会の動向は「セルビア」と形容され、それは当時「恐れる」対象として描写され得るものであった。

そしてこうした動きがセルビア共和国内で伸長する以上、共和国・民族間の関係が代表される連邦の構造において、(参加者の多くがセルビア人である)集会は、ケルテースの表現以上に、もっぱら「民族的な基礎」に基づいていると見なされた。他方、セルビアにおいて、大多数の人びとが各地で一体となって声をあげる状況は、(少数派の民族も参加する)その実態からしても、決して民族主義的ではなく、普遍的で多民族的な出来事であった。それゆえに一連の集会が牽引する連帯と一体化は、他地域への脅威であるどころか、連邦全土に広がり、ユーゴスラヴィア全体を変革する運動になり得るものとして考えられた。

社会主義ユーゴスラヴィア史上、前例を見ないほどの大規模な「ナロード」の結集は、その実、体制内のいずれの人びとにとっても、体制危機からの脱却をめざす政治と社会の進路を左右しかねない重要な事態であった。だが本節で検討したように、運動およびその主体をなすナロードの評価をめぐっては、セルビア内外で大きく見解が分かれ、対立する。セルビア外の共和国では、ナロードは民族的に理解され、一連の集会はナショナリズムの拡大を生み出すものとして非難される一方、セルビアにおいて、ナロードは民族的であると同時に普遍人民的であるがゆえ、その結集がナショナリズムと関連づけられることは明確に拒否された。だがどちらにとってもそこには、一連の集会を通じて、ヴォイヴォディナを含むセルビアにおいて、政治的な一体化や集団的な高揚感を志向する力学が生み出され、それが運動の拡大とともに社会内に浸透していく現状が映し出されていると言えよう。

---

104 この点については、注28およびその前後の本文記述も参照。

105 *Borba*, 06. 10. 1988, p. 3. [ ] 内筆者。

## おわりに

本稿では、1988年夏からヴォイヴォディナ自治州で多発した諸集会に焦点を当て、一連の運動の展開とナショナリズムの関係について考察を進めてきた。その際、諸集会の全般的な構図とともに、具体的な運動の過程を分析することによって、ナショナリズムがどのような機能をもち、またどのように理解されて、集会の諸相と結びついていたのかを検討した。これまでの議論を踏まえ、ヴォイヴォディナの諸集会においてナショナリズムをどのように位置づけることができるか、この点を最後に考えてみたい。

一連の集会に関して、従来の著述や研究では、ミロシェヴィチを長とするセルビア党指導部の上からの組織化やナショナリズムの伝播といった側面が強調され、動員の背景として民族（主義）的な要因が議論の中心に置かれる。だが、そうした見方は一面的であろう。第3節で全般的な構図を踏まえながら整理したように、諸集会において、民族的な価値やナショナリズムが関連する要素は、集会の不可欠な一部を構成しながらも、あくまで部分的であった。集会は様々な主体の組織と参加によって支えられ、ヴォイヴォディナ各地に拡大するなかで、その目的や要求は複数化した。そうした多様性と複数性をまとめたのは、ナショナリズムや民族的な論理ではなく、反官僚の枠組みであり、その包括性が動員の拡大を生み出した。

他方、第4節で検討したように、個々の具体的局面に着目してみると、諸集会では基本的に、潜在的な批判や反体制的な性格づけを回避するために、ユーゴスラヴィア主義や多民族性が積極的に謳われ、民族（主義）的な言動が自制されたことが分かる。だが同時に、周縁的な現象に留まったとはいえ、一部の民族主義的な言動が集会内に見受けられたのも確かであった。そして、そのような徴候を含めて、集会とナショナリズムの問題は、一連の集会の評価をめぐる連邦党指導部の議論のなかで争点のひとつとなった。連邦および共和国の党指導部の間では意見が対立し、クロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナなどの党指導部は、民族的な基礎に基づく集会開催をナショナリズムの拡大の温床と見なして非難する一方、セルビアの党指導部は集会の多民族性を主張し、ナショナリズムの介在を指摘する批判に真っ向から対峙した。このような見解の齟齬には、諸集会を支える象徴的な主体であったナロードに対する認識の違いが横たわっている。前者にとってナロードはもっぱら民族的な主体を意味した反面、後者においては民族のかつ人民的な、より普遍的な主体として考えられた。

以上のような、本稿における個々の具体的過程の検討を踏まえ、ヴォイヴォディナの諸集会におけるナショナリズムについては、次の2点を指摘することができるだろう。

ひとつは、ナショナリズムをめぐる認識の不一致であり、またそれゆえにナショナリズムが議論の対象になり得るという点である。ユーゴスラヴィアの体制において、ナショナリズムは反体制的な概念として了解されており、行き過ぎたものは処罰の対象になった。だが、そもそも何をナショナリズムと見なすか、その境界は曖昧である。ヴォイヴォディナの一連の集会からおよそ1年前の1987年9月、ミロシェヴィチがセルビア共和国党指導部を手中に収めた共和国党組織中央委第8回総会では、ナショナリズムへの姿勢が対立する2派の争点となったが、ここでも双方の間に何がナショナリズムであるかの合意は見られなかった<sup>(106)</sup>。

106 拙稿「1987年セルビアの党内論争とナショナリズムをめぐる議論」。

そうした不一致は、本稿で論じたように、1988年夏以降のヴォイヴォディナの諸集会を介して、集会開催の賛否と連動しながら、連邦レベルや共和国間においても顕在化した。そこではナショナリズムをめぐる論議が生まれるとともに、認識の齟齬は連邦内の意見対立の醸成にさえ寄与した。このように、一連の集会が拡大していった過程には、ナショナリズム自体の認識の問題が少なからず関わっていたことが見てとれる。

2つめは、1点目にも関連し、ナショナリズムに関する見解の齟齬がまさに浮き彫りになる局面が生まれたことである。一連の集会において、当時の政治と社会に与えた影響に鑑みれば、諸集会がもたらした重要な帰結は、体制論理に即して明らかなナショナリズムではなく、集会の拡大を通して政治的な一体化と高揚感が膨張しつつあるその状況であったと考えられる。その過程を介してナロードという集団的な主体が立ち現れ、セルビアからユーゴスラヴィア全土に向けて、大きな政治的力学が形成されつつあることは、観察する側にとっては、民族的主体の勃興を彷彿とさせ、ナショナリズムの高揚として捉えられ得るものであった。一方、当事者にとって、それはナショナリズムの発露ではなく、ナロードの反官僚的な直接行動であると考えられた。もちろん、ナロードの主体が複相的な概念であった点を踏まえれば、それは全くの脱民族的な行動ではない。いずれにせよ、そのような異なる評価を携えながらも、ヴォイヴォディナの諸集会は、連邦と他共和国の党指導部の批判や抑制にもかかわらず、拡大の一途を辿ることに成功し、社会主義ユーゴスラヴィア史上比類のない大規模な政治運動を形成した。

しかし、1989年に入ってすぐ、セルビアとスロヴェニアの間では憲法改正などの体制改革をめぐる共和国間の対立が激化した。そこでは対立図式のもと、セルビア側においては、ヴォイヴォディナの諸集会を支えたナロードの主体が、一気に民族的主体の傾向を濃くし、普遍的な色彩を弱めていく状況が観察される。単純にこの事実からすれば、ここまで論じた一連の集会を通して、未分化のナロードのもとに政治的主体の機能が温められ、大多数の人びとを糾合する力学が生み出されたことが、結果として、共和国間の構図で強固となる民族的主体を準備し、双方の対立のなかで顕著に表出されるナショナリズムの素地をつくったと考えることもできるだろう。この連続性については、本稿で扱った諸集会のその後と1989年の共和国間対立に関する詳しい検討を含めて、今後の課題としたい。



表 ヴォイヴォディナにおける諸集会の展開とその一覧

日付	発生／開催地	規模 <sup>1)</sup>	組織化の母体 <sup>2)</sup>	推定参加者数(人)	備考
07/09	ノヴィ・サド Novi Sad	州都	コソヴォの活動家の「組織委員会」	3千以上、コソヴォから5百	
07/23	パンチェヴォ Pančevo	主要都市	コソヴォの「組織委員会」着手(当日不在)、当地の住民	6～7千人	
7月12、18-19日の連邦党組織中央委幹部会での集会に対する否定的な姿勢					
08/12	ノヴァ・パゾヴァ Nova Pazova	MZ	地元住民の団体主導、MK SSRN 主催	5千	
08/27	ティトヴ・ヴルバス Titov Vrbas	小都市	コソヴォの「組織委員会」、当地の市民と協力	1万～1万5千	
	スルプスキ・ミレティチ Srpski Miletic	MZ	MK SSRN	2千	
9月3日、スメデレヴォ(セルビア)の集会→この後、セルビア本土でも本格化					
09/03	コヴィン Kovin	小都市	コソヴォの「委員会」、地元住民、OK SSRN と DPO 承認	1万5千	午前のスメデレヴォの集会後、午後に対岸の同地で開催。
	ソムボル Sombor	主要都市	「Inus」社	1千5百以上	
09/04	ツルヴェンカ Crvenka	MZ	住民の団体主導、MK SSRN 主催	1万5千超	参加者、演説者の多民族的な構成
09/15	スレムスカ・ミトロヴィツァ Sremska Mitrovica	主要都市	OK SSRN 幹部会、OV SS	3万	そもそもは自治州政府主催の集会
09/17	ラトコヴォ Ratkovo	MZ	住民の要求、MK SSRN 主催	4千	コソヴォのセルビア人・モンテネグロ人への支持、連邦および自治州政府への批判をより鮮明に
	アパティン Apatin	小都市	コミュニンの全 DPO	1万	
	カラヴコヴォ Karavukovo	MZ	MK SSRN 主催、当地の DPO との協力	3千	
09/24	ベラ・ツルクヴァ Bela Crkva	小都市	OK SSRN 主催、ほか DPO との協力	6千	
	ヴルシャツ Vršac	小都市	OK SSRN との合意による住民のグループ	2万5千強	
09/25	ノヴィ・サド	州都	住民や労働者の署名を発端、「Jugoalat」社の労働者主催	8万以上	自治州指導部の交代を初めて要求
9月30日、連邦党組織中央委幹部会は7月25日にセルビア共和国の議会が採択した憲法修正条項を支持					
10/01	プティンツイ Putinci	MZ	MK SSRN	4千	
10/02	バナツキ・カルロヴァツ Banatski Karlovac	MZ	地域共同体の党組織、SSRN、退役軍人会	7千	
	パチュカ・パランカ Bačka Palanka	小都市	住民の働きかけを受け、OK SSRN と OV SS 主催	2万5千以上	R・パンコヴとケルテース・Mの批判演説
上記集会の演説者2名に対し、自治州党指導部が政治責任を追及する声明→強い反発、以下の大規模集会へ					
10/05-06	ノヴィ・サド	州都	パチュカ・パランカの労働者・市民の動きにノヴィ・サドの諸企業の労働者が合流	20万以上	集会代表者と自治州党指導部の交渉
10月6日、自治州党組織州委員会臨時総会において、同幹部会が辞職を提出し、賛成多数で可決					

10/07	クーラ Kula	小都市	地元の党組織	7千5百	
	ルマ Ruma	小都市	幾つかの地元企業の労働者	8千	
	スレムスカ・ミトロヴィツァ Šid	主要都市	「Mitros」社などの労働者	1万	
10/08	ズレニャニン Zrenjanin	主要都市	OK SSRN、OV SS	3万	
	キキンダ Kikinda	主要都市	OK SSRN / 自発的	1万/?	2つの集会
10/09	スポティツァ Subotica	主要都市	OK SSRN	1万	
	ロヴチェナツ Lovćenac	MZ	OK SSRN、OV SS	5千5百	
10月7-10日、モンテネグロの首都ティトグラードおよびニクシチ (Nikšić) で労働者や学生を中心とする大規模なデモ・集会					
10/14	スタニシチ Stanišić	MZ	MK SSRN	2千	
10/15	インジヤ Indija	小都市	OK SSRN	1万以上	
	ゾムボル Čurug	主要都市	OK SSRN、OV SS、コミュ ーン議会	1万	
10/16	ノヴィ・バノヴツィ Novi Banovci	MZ	MK SSRN	2千以上	
10/21	ルマ	小都市	MK SSRN、OV SS	3千以上	
10月6日以後の諸集会は、自治州新指導部やセルビア共和国指導部への支持を示すも、基本的には各地のコミュニン指導部に対する不支持を表明					

出典：Kerčov et al., *Mitinzi*, pp. 42-52 の記述をもとに筆者作成。

#### 注1) 発生／開催地の規模

主要都市： ヴォイヴォディナ自治州におけるノヴィ・サドを除く主要都市

小都市： 地方行政の基礎単位であるコミュニン（原語は「オプシュティナ (opština)」）の中心都市ないし諸コミュニンにおける中心地

MZ (mesna zajednica)：地域共同体（上記コミュニン内の各地区をなす地域単位）

#### 注2) 組織化母体の略称

SSRN (Socijalistički savez radnog naroda)

労働人民社会主義同盟（党の大衆組織）

OK (Opštinska konferencija) SSRN

労働人民社会主義同盟コミュニン協議会

MK (Mesna konferencija) SSRN

労働人民社会主義同盟地域協議会

DPO (Društveno-politička organizacija)

社会政治組織（党組織、労働人民社会主義同盟、労働組合同盟などの組織を総じた名称）

OV SS (Opštinsko veće Saveza sindikata)

労働組合同盟 (SS) (=労働組合) コミュニン会議

## **Mass Movements and Nationalism in Serbia and Yugoslavia in 1988: The Case of Vojvodina**

**SUZUKI Kenta**

The year of 1988 is often regarded as a period of mass political actions in the politics of Socialist Serbia and Yugoslavia. From summer to autumn of that year, a series of meetings and demonstrations erupted and spread from one place to another with mutual connections. These events first took place in Vojvodina, followed by Serbia including Kosovo and Montenegro. As a whole, they are frequently called the “anti-bureaucratic revolution,” and it is generally said that they created large popular support for the Serbian party leadership headed by Slobodan Milošević and led the escalation of nationalism in the political stages and discourse in Serbia in particular and in Yugoslavia in general.

This article explores the relationship of such mass movements with nationalism, particularly focusing on the development of meetings in the Socialist Autonomous Province of Vojvodina in Serbia from July to October 1988. It attempts to gauge the extent to which nationalism, or national/nationalist values and factors, shaped various aspects of these mass movements in Vojvodina, taking two steps for this purpose: the first is to grasp national(ist) factors in the overall structure of meetings, and the second is to analyze the ways in which nationalism was being articulated, understood, and discussed in the process of meetings, addressing their individual scenes and issues.

On July 9, 1988, a protest meeting was organized in Novi Sad, the capital of Vojvodina, by a voluntary committee of Serbian and Montenegrin activists from Kosovo, with a view toward making the strained situation of Serbs and Montenegrins in Kosovo widely known beyond the region. It was the first meeting that triggered a chain of meetings throughout the province in the following three months. A detailed study of these events demonstrates that overall 33 meetings took place in 28 municipalities in Vojvodina during that period, in which around 2.3 million people participated. Similar mass movements expanded to other cities and towns in Serbia and Montenegro. In Novi Sad, the largest meeting took place between October 5 and 6, which eventually resulted in the resignation of the party leadership of the province. It was the first time in Socialist Yugoslavia that a party leadership surrendered to the pressure of mass movements.

Such a series of meetings in Vojvodina was not separate events, but was connected with and composed of multiple factors. In the initial phase, the meetings were planned to appeal to solidarity with Serbs and Montenegrins in Kosovo, which demonstrates an instrumental role of national values and factors. Yet, as the meetings subsequently expanded more and more around the province, those involved (organizers and participants) diversified, with the increase in non-national factors leading to the pluralization and radicalization of their purposes and demands. Therefore, it could be observed that nationalism and national factors were not central, let alone dominant, in the various aspects composing the series of meetings in Vojvodina. In-

stead, what underpinned and strengthened the logic and context of large-scale mobilization and the unity of meetings was the frame of anti-bureaucratic struggle. It does not mean that national factors did not matter, but suggests that they constituted an indispensable but partial element in the movements.

Looking closely at individual scenes and issues in the meetings with variety and plurality enables us to reveal that their organizers and participants always tried either to avoid their own possible nationalistic and anti-regime tendencies very carefully or to emphasize the multi-ethnic nature of their meetings. Yet, in some cases, the behaviors of specific individuals and groups among the participants, however marginal they were, did become an object of dispute and criticism, as they were considered as an explicit expression of nationalism and nationalistic inclinations. Within the federal party leadership, meanwhile, serious discrepancy and even confrontation in opinions emerged among republic/province party leaderships concerning a series of meetings in Vojvodina as well as the question of nationalism. The controversy revolved around the interpretation of the meetings and the characterization of their agenda. In the situation where the masses (*narod*) suddenly appeared in the politics and society of Serbia and Yugoslavia in the form of frequent meetings, some (mainly in Croatia, Bosnia and Herzegovina, and also Slovenia) condemned them and their structure on the (Serbian) national foundation for the danger of nationalism. Others (basically in Serbia and also Montenegro) supported their legitimate actions predicated on the people, not a particular nation, claiming their multi-national nature incorporating other nations and ethnic groups in Vojvodina alongside Serbs and Montenegrins. This critical gap remained serious and unbridgeable.

To sum up, this article sheds light on two aspects concerning the place of nationalism amid the expanding meetings in Vojvodina. The first aspect indicates disagreements among relevant actors and groups of meetings over the understanding of nationalism, which made nationalism itself an object of debate. The second aspect is the very circumstances of the meetings under which a great number of people were being mobilized and united on a large scale around Vojvodina and Serbia. The mass dynamics was an important result of a chain of meetings in Vojvodina, whether it was interpreted as nationalist, an escalation of nationalism, or the people's non-nationalist movement.